

慶應義塾大学看護医療学部

研究年報 2025

Annual Report of Research 2025
Keio University Faculty of Nursing and Medical Care

Keio University



巻頭言	1
-----------	---

看護医療学部教員の 2025 年度研究活動報告

(所属キャンパス別・五十音順)

湘南藤沢キャンパス (SFC)

石川 志麻	2
加藤 由希子	3
金澤 悠喜	4
小池 智子	6
杉本 なおみ	9
杉山 大典	12
鈴木 美穂	13
田口 敦子	14
辻 恵子	16
永田 智子	17
バティ, アーロン	19
平野 優子	20
深堀 浩樹	22
藤井 千枝子	24
藤屋 リカ	26
細坂 泰子	27
真志田 祐理子	28
増田 真也	31
松崎 愛	32
三浦 桃子	33
水井 翠	34
三原 郁奈	35
宮川 祥子	36
山内 慶太	37
山本 なつ紀	39

信濃町キャンパス

新井 康通	41
新幡 智子	43
井上 真帆	44
上山 昌	45
大坂 和可子	46
小澤 典子	48
添田 英津子	49
田村 紀子	50
富崎 悦子	51
野末 聖香	52
朴 順禮	53
福田 紀子	54
藤島 麻美	55

船戸 真衣	56
堀口 崇	57
緑川 綾	58
村上 好恵	59
矢ヶ崎 香	60

慶應義塾大学看護医療学部 研究年報 2025

巻頭言

2026 年 7 月

慶應義塾大学 看護医療学部
研究推進委員会 深堀浩樹

慶應義塾大学 看護医療学部では、2023 年版より研究年報をウェブサイト公開し、看護医療学部に所属する教員の研究活動を内外に公表しています。この研究年報は、各教員の研究活動の概要がキーワードとともに記載されており、公表された研究成果だけでなく現在進行中の研究活動についても理解できるように工夫されています。また、研究業績を記載するうえでは、看護医療学部の教員の幅広い専門性と研究活動を反映するために、発表された論文や学会発表の実績にとどまらず、社会貢献活動やメディア掲載の実績など幅広い内容を含むことができるような工夫もしています。

2025 年度の看護医療学部の教員の研究活動を概観すると、それぞれの教員の専門領域を基盤としつつ、看護学のみならず医学・工学・経営学・心理学・言語学といった幅広いテーマの研究活動が行われており、専門の学会等での成果の公表に加え、地域社会や臨床現場、行政機関との協働や普及・実装活動も行われていることが見て取れます。研究年報を多くの方にご覧いただくことで、こうした看護医療学部に所属する教員の分野横断的で自由な研究活動について多くの方に知っていただき、看護医療学部内外の人々が協働した社会と未来に貢献できる研究活動につながっていくことを願っています。

なお、退職や研究進捗の事情などにより、2025 年度に看護医療学部に在籍していたすべての教員の研究活動が掲載されているわけではございませんので、ご承知おきください。

氏名：石川 志麻	職位：専任講師	分野：地域看護学分野
2025 年度の研究活動の概要 1. 大規模団地における社会的孤立予防に資する CBPR 研究： 2023 年 8 月より 2 団地をフィールドに CBPR を実施している。地域参加型研究として、それぞれの地域住民・関係者と共に研究活動を推進している。関係者が異動や体調不良などで緩やかに入れ替わる中で、属人的にならない活動の在り方を模索している。 2. 医療的ケア児と家族を支える効果的な多職種連携の在り方検討： 自身の先行研究で作成した医療的ケア児と家族の生活の拡大につながる多職種の在り方に関する指標の検証を行っており、今年度は居住地域の学校（特別支援学校を除く）に登校する児の保護者に調査を行った。居住地域の学校に在籍している医療的ケア児は一定数いることが数値上では分かっているものの、特別支援学校に通う児童の保護者のような当事者間のネットワークが確認できず、保護者が孤立しやすいことが分かった。		
キーワード 社会的孤立・孤独予防、CBPR、地域包括ケアシステム、医療的ケア児、多職種連携		
研究業績・活動 【学会発表】 石川志麻. 医療的ケア児・家族が利用しているサービス事業者と当事者のペアリング調査-当事者の QOL 向上を意図した多職種の連携促進調査-. 第 28 回日本地域看護学会学術集会; 2025 Sep6-7; 東京. 石川志麻. 茅ヶ崎市 A 地区で行う社会的孤立・孤独予防活動における産官学連携. ヘルスコミュニケーションウィーク 2025; 2025 Oct 4-5; 東京. 石川志麻, 加藤文俊, 平野優子, 加藤由希子, 田口敦子, 赤塚永貴. 大規模団地住民の社会的孤立・孤独予防に係る CBPR で研究者に求められる役割. 第 84 回日本公衆衛生学会総会; 2025 Oct 29-31; 静岡. 【社会貢献活動】 ● 茅ヶ崎市難病対策地域協議会委員長 ● 藤沢市障がい者介護給付費等支給審査会委員 ● 平塚市地域包括ケア推進課 地域包括支援センター地域診断研修支援 ● 未来先導基金 2025 年度 サステイナブルキャンパスプログラム ● 健康と地域プロジェクトの一環として、エコキャップ運動・キャップがつなげる D & I 活動を主催している。SFC キャンパス近隣の福祉施設 2 施設の利用者・職員、SFC3 学部学生と共にキャンパス内のペットボトルキャップ回収を行っている。共にキャップ回収を行うことで、障がいのある方と学生・教職員の相互理解を促進し、回収作業を通じてキャンパス内のごみ分別への動機づけを高めることを目的としている。2025 年度は活動参加した学生が F M 大阪 マクセル meets カレッジナレッジで活動の様子を報告した。		

氏 名 : 加藤 由希子	職 位 : 助教	分 野 : 地域看護学
2025 年 度 の 研 究 活 動 の 概 要 : - ワクチン躊躇に関する指標と地域看護実践における活用について解説を執筆した - 保健師活動マネジメントツール開発に関する研究において、母子保健版プロセスチャートの開発と保健師活動マネジメントツールの実装に向けたロードマップに関する研究発表を行った 2026年度開始予定の、日本においてワクチンを全く受けずに育った子ども（完全未接種児）に関する研究を計画し、研究費を獲得した		
キ ー ワ ー ド : 母子保健活動の保健師用語標準化、ワクチン躊躇、完全未接種児		
研 究 業 績 ・ 活 動 【論文】 大澤まどか, 赤塚永貴, 田口敦子, 石川志麻, 平野優子, <u>加藤由希子</u>, 吉田裕美, 阿蘇瑞季, 岸下洸一朗, 高山公子, 柳町純子, 水流聡子. 母子保健における ICT を活用した保健師活動マネジメントツールの開発にむけたコンテンツの作成. 日本臨床知識学会誌 6, 2025 Takahiro Tsuge, Norio Yamamoto, Yosuke Tomita, Akikazu Hagiyaama, Daijo Shiratsuchi, <u>Yukiko Kato</u>, Shunsuke Taito, Takashi Yorifuji, Reporting and Methodological Qualities of Systematic Reviews in Rehabilitation Journals After 2020: A Cross-Sectional Meta-Epidemiological Study, <i>Physical Therapy</i>, Volume 105, Issue 4, April 2025, pzaf032, https://doi.org/10.1093/ptj/pzaf032 【解説】 <u>加藤由希子</u>, 齋藤あや. 地域看護に活用できるインデックス連載記事「ワクチン躊躇」. 日本地域看護学会誌, 28(3), 64-70, 2025. 【学会発表】 <u>加藤由希子</u>, 田口敦子, 吉田裕美, 泰地可南子, 赤塚永貴, 石川志麻, 平野優子, 岸下洸一朗, 高山公子, 柳町純子, 本木隆規, 水流聡子. 保健師活動の ICT 活用・デジタル化研究 (第1報) 母子保健版プロセスチャートの開発. 第84回日本公衆衛生学会総会. 2025.10(静岡) <u>加藤由希子</u>, 吉田裕美, 泰地可南子, 赤塚永貴, 中尾彰宏, 水流聡子, 田口敦子. 保健師活動マネジメントツール実装に向けたロードマップ: 自治体情報環境を考慮したデータ連携設計の検討. 第10回日本臨床知識学会学術集会. 2025.12(福岡)		

氏名：金澤 悠喜	職位：専任講師	分野：母性看護学・助産学
2025 年度の研究活動の概要： 助産・看護の分野を中心に、出産や子育てに関わる人々の経験や健康をよりよく理解し、支えることを目的としている。当該年度の論文は、第一子誕生後の夫婦が感じる「公平さ」や、授乳期の女性に対する助産師の知識・対応について明らかにした。学会発表では、乳幼児の新しい採尿方法の開発や、出産時の出血量の測定方法、母乳育児の経験、夫婦関係などの研究結果を報告した。また、AI を用いた胎児評価や医療技術の開発など、看護と工学を組み合わせた新しい研究にも挑戦している。さらに、学会活動や若手支援、アートをを用いた研究発信にも関わり、研究成果を社会に広く伝える活動も行っている。		
キーワード： 助産学／周産期ケア／家族関係（夫婦関係）／看護理工学／母子健康		
研究業績・活動 【論文】 Kanazawa Y., Unno T., Kano N. (2025). Feeling of Equity and Inequity Experienced by Spouses after the Birth of their First Child. <i>International Journal of Nursing and Midwifery</i> , 17(1), 1～11. DOI: https://doi.org/10.5897/IJNM2025.0546 Kanazawa Y. (2025). Midwives' knowledge and diagnostic practices for mastitis and breast cancer in breastfeeding women in Japan: A cross-sectional study. <i>European Journal of Midwifery</i> , 9, 1～7. DOI: https://doi.org/10.18332/ejm/209494 【学会発表】 Saka S., Kanazawa Y., Takei Y., Katoh A., Kuwana K. (2025). Performance comparison of fetal assessment systems based on CNN-based architectures depending on the feature regions of the input data. 21st Asian Conference on Computer-Aided Surgery (ACCAS 2025), 福岡県, 2025.9. 齋藤由里佳, 谷口菜摘, 松見友紀, 金澤悠喜. 臨床×研究×子育て、どうやってる?～キャリアと生活のリアル共有～. 看護実践研究学会第7回学術集会 交流集会, 岐阜県, 2025.9. 金澤悠喜, 宮園弥生, 杉山大典. (2025). 乳幼児を対象とした新たな採尿法の開発～新旧採尿法による成人の尿検査値の比較～. 第13回看護理工学会学術集会, 滋賀県, 2025.11. 金澤悠喜, 宮園弥生, 杉山大典. (2025). 乳幼児を対象とした新たな採尿法の開発～新旧採尿法による幼児の尿検査値の比較～. 第13回看護理工学会学術集会, 滋賀県, 2025.11. 山田ゆり, 金光淳, 岡原正幸, 熊澤あいみ, 金澤悠喜, 小田浩之. (2025). アートベース・リサーチの実践と未来. 第98回日本社会学会大会, 東京都, 2025.11.		

楠田佳緒，三原陽一郎，桑名健太，北村言，武石陽子，吉本佳世，金澤悠喜，吉田美香子，長江祐吾，小川賀恵，雨宮歩．（2025）．看護理工学研究の開発プロセスにおけるプレ要求仕様書の有効性検証．第13回看護理工学会学術集会，滋賀県，2025.11.

萩原悠太，松堂翔一，武井裕輔，金澤悠喜，桑名健太．臍帯の切断完了確認機構を搭載した臍帯切断の開発．第34回日本コンピュータ外科学会大会，東京都，2025.11.

金澤悠喜．（2025）．子育てを開始した夫婦各々の幼少期の家族レジリエンスが夫婦親密度に与える影響．第45回日本看護科学学会学術集会，新潟県，2025.12.

Nakayama K., Isoyama A., Kanazawa Y., Yoshida Y., Katoh A. (2026). Women's breastfeeding experiences after breast cancer treatment. 29th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2026), シンガポール, 2026.2.

Kanazawa Y., Saito Y., Kishi Y., Takahashi S., Kako J. (2026). Methods Used by Health Care Professional to Quantify Blood Loss During Vagina Birth: A Scoping Review. 29th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2026), シンガポール, 2026.2.

岡原正幸，今井亜由美，金澤悠喜，小田浩之，原口可奈子．（2026）．

Autoethnographic Arts-Based Research. 2026 International Symposium on Autoethnography and Narrative, オンライン開催，2026.3.

【受賞、表彰】

- ・ 第13回看護理工学会学術集会優秀演題賞：金澤悠喜，宮園弥生，杉山大典．（2025）．乳幼児を対象とした新たな採尿法の開発～新旧採尿法による成人の尿検査値の比較～．第13回看護理工学会学術集会，滋賀県，2025.11.
- ・ 慶應 SFC 学会第27回学術交流大会研究発表・卒業プロジェクト発表金賞：古江りこ，金澤悠喜．日本の中等教育における性教育が大学生の避妊の必要性理解に及ぼす影響．慶應 SFC 学会第27回学術交流大会研究発表・卒業プロジェクト発表．慶應義塾大学 SFC キャンパス，2026.3.

【社会貢献活動】

- ・ 高橋聡明，椿美智博，橋本友美，金澤悠喜，小林雅美．看護研究への入り口．令和7年度日本看護科学学会若手の会の南関東エリア検討会，東京大学，2025.8.
- ・ 学会活動の一部：日本助産学会（ガイドライン委員），茨城県母性衛生学会（幹事，編集委員），日本フォレンジック看護学会（代議員，編集委員），看護理工学会会員（次世代委員，評議員），日本看護科学学会（JANS若手の会「エリア・コーディネーター」）
- ・ 茨城県助産師会（勤務部会副部会長、安全対策委員）：研修会3回開催
- ・ 新生児蘇生法インストラクター：講習会2回開催

【その他】

- ・ 金澤悠喜，岡原正幸，金子悦子，佐藤靖子，高橋春美，松橋睦．人の表現が人をエンパワーする Art-Based Research～医療従事者の語りに焦点を当てて【慶應クラファン】．SFC 万学博覧会 2025，神奈川県，2025.11.

氏名：小池 智子	職位：准教授	分野：看護管理・政策
2025 年度の研究活動の概要： 1. ケース・メソッド教育による病院管理者のマネジメント能力育成プログラム開発 1) 慶應義塾大学病院における多職種合同ケースメソッド教育 慶應義塾大学病院と共同し、病院管理者のマネジメント能力強化を目的に、組織横断的な管理課題を取材して4つのケースを作成しにケースメソッド研修（年6回）を開催した。参加者は病院部門管理者 12 名（看護部、放射線技術室、臨床検査技術室、食養管理室、リハビリ室、薬剤部）で客観評価、主観評価（管理能力に関するweb調査）により、多様な部門の管理者が合同で研修を行うことの意義・効果を確認した。 2) 全国の認定看護管理者教育課程等におけるケースメソッド教育の実践・普及 本プログラムで作成したケースは、健康マネジメント研究科「看護管理」の授業や全国の認定看護管理者教育課程（サードレベル6課程、セカンドレベル2課程、ファーストレベル1課程）等において使用し、ケースメソッド教育を実施した。また、これらの教育実践評価の結果等を新たな認定看護管理者教育課程プログラムの改訂検討資料として提出し、ケースメソッドを活用した教育プログラムについて提言をした。 2. 医療勤務環境改善に資する Nudge 開発・普及に関する研究 行動経済学・行動科学等の行動インサイトの知見およびアフォーダンス理論を活用し、多様な職種を対象とした、医療機関・介護施設の職場改善に資するナッジ設計ワークショップを全国 9 箇所開催し、職場のナッジ実践の支援および評価を行った。さらにナッジ実践活動事例の収集・分類と効果メカニズムの分析を行った。		
キーワード： ケース・メソッド教育 ナッジ 医療安全 感染予防行動 ソーシャル・ネットワーク		
研究業績・活動 【論文】 小池 智子, 鈴木 徳洋：【行動科学で無理なく実践しよう!スタッフの心を動かす感染対策】なぜ感染対策が実践されないのか 行動の秘密を解き明かす(解説), INFECTION CONTROL(0919-1011)34 (11) P. 1078-1083, 2025. Hiroki Iwata, Taiki Kirihara, Noriko Kobayashi, Yuki Nakamura, Tomoko Koike, Katsunori Yamaura; Community Pharmacists' Attitudes and Experiences Regarding the Promotion of Vaccinations in Japan, Keio J Med, 2026 Feb 13. doi: 10.2302/kjm.2025-0007-0A 【学会発表】 小池智子：基調講演【基調講演】2040 年に向けて、看護の価値をどうつなぎ、創っていくか, 2025 年度日本看護協会全国看護師交流集会Ⅰ（病院領域）（2025.06, 千葉） 大野星子, 小池智子, 田山聡子, 唐澤牧子：急性期病院における看護職の貢献の認識に関する質的研究, 第 29 回日本看護管理学会学術集会・口演（2025.08, 北海道）		

大野星子, 小池智子, 田山聡子, 唐澤牧子：急性期病院における看護職の貢献感を高める働きかけに関する質的研究, 第 29 回日本看護管理学会学術集会・口演 (2025.08, 北海道)

小池智子, 加藤恵里子, 内田智栄, 宗廣妙子, 勝又徳子, 岡本陽子, 田村紀子, 大野星子：病院管理能力を高める多職種合同ケースメソッド教育の実施と評価, 第 29 回日本看護管理学会学術集会・示説 (2025.08, 北海道)

小池智子, 加藤恵里子, 内田智栄, 宗廣妙子, 勝又徳子, 岡本陽子, 杉浦なおみ：思わず行動したくなる仕組みづくり：職場のナッジを設計しよう！, 第 29 回日本看護管理学会学術集会・インフォメーションエキスチェンジ (2025.08, 北海道)

鄭 佳紅, 小池 智子, 藤野 泰平, 渡邊 千登世, 井高 貴之, 大森 祥乃, 丹野 真理子：看護の適正評価を考える ポスト 2025 に向けて医療 DX 推進で看護の質を上げる, 第 29 回日本看護管理学会学術集会・インフォメーションエキスチェンジ (2025.08, 北海道)

田山聡子, 小池智子：クリティカルケア領域での多職種チーム学習に関するナラティブレビュー, 第 53 回日本集中治療学会学術集会 (2026.03・神奈川)

【受賞・表彰】

令和 7 年慶應義塾賞、令和 7 年度神奈川県保健衛生表彰

【社会貢献活動】

神奈川県総合計画審議会副会長 (至 2025.3)。日本看護管理学会副理事長

【その他：主な講演・研修・ワークショップ】

1. どうすれば変わる！？感染対策の行動変容～ナッジ理論を感染対策に活かすには～, (吉田製薬株式会社) Y's Seminar2025【第 1 回】医療関連感染と消毒の WEB セミナー」2025 年 4 月 19 日 (online)
2. ナッジで変える・変わる医療介護現場の医療安全～思わず行動したくなる仕組みづくり～, 栃木県民医連研修, 2025 年 7 月 30 日 (栃木県)
3. ナッジ設計ワークショップ：わたしの看護現場に合ったナッジで職場をよりよくしよう！, 公益社団法人神奈川県看護協会・看護師職能 I 研修会, 2025 年 7 月 30 日 (神奈川県)
4. ナッジを活用した医療現場の業務改善, 川崎市病院看護部長会研修, 2025 年 10 月 23 日 (神奈川県)
5. より良い意思決定に向けたナッジの活用：全日本民医連医療介護安全交流集会ワークショップ, 2025 年 10 月 26 日 (東京都)
6. 職場の感染管理活動へのナッジ活用, 第 11 回日本感染管理ネットワーク関東支部地方会, 2025 年 11 月 22 日
7. 2040 年に向けて、看護の価値をどうつなぎ、創っていくか, 福井県看護協会 社会経済福祉委員会研修, 12 月 13 日 (福井県)
8. ナッジで変える・変わる現場の医療安全活動, 自衛隊中央病院「医療安全研修」2026 年 1 月 7 日 (東京都)

9. 行動経済学・ナッジ理論の基礎と医療分野での活用、日本の医療の未来を考える会
2026 年 2 月 18 日（東京都）

氏名：杉本 なおみ	職位：教授	分野：自然言語
2025 年度の研究活動の概要 医療コミュニケーション学・コミュニケーション教育学を基盤とし、社会的孤立・孤独予防、子宮頸がん検診に関するヘルスリテラシー、医療者教育モデル・コア・カリキュラム、在宅移行期の病院医・在宅医間の診療情報共有、に関する研究を推進した。 1. 社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築に関する研究（SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム～社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築「サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる孤立・孤独予防モデル構築プロジェクト(AmPlatea)」）の一環として、体組成計データから地域活動団体を推薦する仕組みである「コミュニティ・コンパス」の実証実験等を実施した。 2. 上記から派生した共同研究として、全国自治体子宮頸がん検診案内ウェブサイトの理解しやすさ・行動しやすさに関する共同研究を行い、日本ウーマンズヘルス学会学術集会および Open Research Forum 第 25 回学術交流大会にてその成果を発表した。さらに、地域専門職が社会的孤立・孤独状態にある人々を支援する際に体験する「道徳的苦悩」に関する文献検討を行い、その成果を論文として公表した。 3. 医療コミュニケーション教育に関する研究では、看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおける「コミュニケーション」の位置づけを医学・歯学・薬学と比較検討し、看護学領域におけるコミュニケーション教育の特徴と課題を明らかにした。また、日本看護コミュニケーション学会学術集会では「卒前・卒後のコミュニケーションラダー」シンポジウムの共同座長を務め、卒前・卒後を接続するコミュニケーション教育のあり方について議論を行った。さらに、日英看護師の語りをもとに「ネガティブ・ケイパビリティ」の比較検討を行い、不確実性に向き合う看護実践能力について考察した。 4. 在宅移行期にある多疾患併存状態高齢者に関する診療情報共有に関する研究では、病院医・在宅医双方を対象とした質問紙調査および病院医インタビュー調査を実施し、在宅移行期に必要とされる診療情報の内容や共有方法について検討を進めた。特に、病識、治療協力度、ACP/DNAR、家族背景など、疾患情報のみでは捉えきれない生活・価値観に関する情報共有の重要性に着目し、在宅医療における多職種連携と患者中心の情報共有のあり方について考察した。研究成果の一部をヘルスコミュニケーションウィーク 2025 および日本保健医療福祉連携教育学会学術集会にて発表した。		

5. 研究成果の社会還元として、研修医教育、訪問看護管理、地域医療職研修、歯科医療従事者向け講演等を行った。特に、医療面接・在宅医療・看護管理・要介護高齢者歯科診療などの場面における対患者・家族コミュニケーションを主なテーマとし、医療現場におけるコミュニケーション教育の普及に取り組んだ。
キーワード 医療コミュニケーション学、コミュニケーション教育学、社会的孤立・孤独、ネガティブ・ケイパビリティ、道徳的苦悩
研究業績・活動 【論文】 高橋愛海, 杉本なおみ (2025) 社会的孤立・孤独状態の人々を支援する地域医療職の道徳的苦悩に関する文献検討 日本医学看護学教育学会誌 34 (2)、39-47. 中川真知子, 高橋愛海, 杉本なおみ (2025) 看護におけるネガティブ・ケイパビリティ— 日英看護師の語りから読み解く共通点と相違点— 慶應義塾大学日吉紀要 (人文科学) 40, 191-210. 杉本なおみ (2025) 看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおける「コミュニケーション」の捉え方～医学・歯学・薬学との比較～日本看護コミュニケーション学会誌 1 (1)、21-29. 【学会発表】 高橋愛海, 近藤奏, 白石茉莉奈, 龍見夏菜子, 辻恵子, 杉本なおみ (2025) 全国自治体子宮頸がん検診案内ウェブサイトの理解しやすさ・行動しやすさの評価～「コミュニティ・コンパス」活用に向けた基礎調査～第 24 回日本ウーマンズヘルス学会学術集会 東京医科大学：東京都新宿区 2025 年 8 月 3 日. 杉本なおみ, 大西弘高 (2025) 在宅移行期多疾患併存状態高齢患者の診療情報提供に関する病院医・在宅医対象質問紙 (予備) 調査 ヘルスコミュニケーションウィーク 2025 東京大学：東京都文京区 2025 年 10 月 4 日. 杉本なおみ, 會田信子 (2025) 卒前・卒後のコミュニケーションラダー 第 2 回日本看護コミュニケーション学会学術集会シンポジウム (共同座長) 東京大学：東京都文京区 2025 年 10 月 5 日. 杉本なおみ, 大西弘高 (2025) 複数疾患を持つ高齢者に関する診療情報の質の向上：在宅医・病院医双方の視点研究 (病院医インタビュー調査) 日本保健医療福祉連携教育学会第 18 回学術集会 昭和医科大学：東京都品川区 2025 年 10 月 26 日. 龍見夏菜子, 白石茉莉奈, 近藤奏, 高橋愛海, 杉本なおみ (2025) 全国自治体ウェブサイト上の子宮頸がん検診案内：内容及び体裁の比較検討 慶應 SFC 学会第 26 回学術交流大会 (奨励賞) 2025 年 11 月 23 日. 杉本なおみ (2025) ゆるやかにつながる社会に向けて～大磯町の社会的孤立・孤独を考える～ (座長) 大磯地方創生フォーラム 2025 ノジマ大磯スクエア：神奈川県中郡大磯町 2025 年 12 月 6 日. 【講演】 杉本なおみ (2025) 「異文化コミュニケーションを学び医療コミュニケーションを教える」国際ロータリー財団イノベーションゲートウェイ湘南ロータリークラブ例会卓話 湘南ヘルスイノベーションパーク：神奈川県藤沢市 2025 年 9 月 20 日.

- 杉本なおみ(2025)「円滑なステーション運営に求められるコミュニケーション 管理者へのアドバイス」一般社団法人神奈川県訪問看護ステーション協議会研修委員会主催（神奈川県委託 訪問看護管理者研修事業）2025年度 管理者スキルアップ研修 藤沢ビジョンセンターみなとみらい：神奈川県横浜市 2025年12月13日。
- 杉本なおみ(2025)「医療面接における研修医指導」特定非営利活動法人 VHJ 機構第27回臨床研修指導医養成講座 公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院：大阪府大阪市 2025年11月29日。
- 杉本なおみ(2025)「医療のためのコミュニケーション」全国労災病院臨床研修指導医講習会。独立行政法人労働者健康福祉機構総合研修センター：神奈川県川崎市（第33回 2025年6月27日；第34回 2026年1月23日）。
- 杉本なおみ(2026) 「要介護高齢者歯科診療における对患者・家族および医療者間のコミュニケーション」 公益社団法人藤沢市歯科医師会主催 要介護高齢者歯科学術講演会 藤沢市口腔保健センター：神奈川県藤沢市。2026年2月7日。
- 杉本なおみ(2026) 「訪問看護ステーションにおける看護管理コミュニケーション」 神奈川県民主医療機関連合会主催 2025年度訪問看護ステーション所長研修会「訪問看護ステーションにおける看護管理コミュニケーション」 神奈川県民主医療機関連合会：神奈川県横浜市。2026年2月28日。

氏名：杉山 大典	職位：教授	分野：健康科学・病態学
2025 年度の研究活動の概要： 2025 年度は主に以下のテーマの研究テーマに取り組んだ。 1. 生活習慣病対策のための住環境整備に関する研究 2. 関節リウマチ治療薬の適正使用に関する薬剤疫学的研究 上記に加え、直接関与しているコホート研究（神戸研究、鶴岡研究）をベースにした疫学研究や国際共同研究など予防に関連する研究を中心に様々な研究に関わっている。		
キーワード： 予防医学、疫学、公衆衛生学、生活習慣病、健診・検診、定量的評価		
研究業績・活動 Shiotsuki Y, Iida M, Tsuchiya S, Matsumoto M, <u>Sugiyama D</u> . Changes in rheumatoid arthritis medication in pregnancy: a retrospective observational study using a Japanese claims database. Mod Rheumatol. 2026 Apr 13;36(3):345-352. doi: 10.1093/mr/roaf106. Maekawa K, <u>Sugiyama D</u> , Imanishi T, Oki T, Ohnuma K, Carayannopoulos MO, Satomi-Kobayashi S, Kawano S. Development and validation of a dual-perspective competency scale for novice medical laboratory scientists in Japan. BMC Med Educ. 2026 Jan 19;26(1):544. doi: 10.1186/s12909-026-08626-9. Akatsuka E, Taguchi A, Miyagawa S, <u>Sugiyama D</u> . Development of a digital health competency scale for public health nurses. Int J Med Inform. 2025 Dec;204:106076. doi: 10.1016/j.ijmedinf.2025.106076. Epub 2025 Aug 7. Miyake A, Iida M, Harada S, <u>Sugiyama D</u> , Matsumoto M, Miyagawa N, Toki R, Edagawa S, Hirata A, Kuwabara K, Okamura T, Sato A, Amano K, Hirayama A, Sugimoto M, Soga T, Tomita M, Arakawa K, Kisu I, Yamagami W, Takebayashi T. Longitudinal Study of Plasma Metabolites During Menopause and Their Associations With Later Onset of Metabolic Syndrome. J Clin Endocrinol Metab. 2026 May 19;111(6):e1672-e1680. doi: 10.1210/clinem/dgaf666. Hirata A, Harada S, Iida M, Matsumoto M, Miyagawa N, Toki R, Edagawa S, Shibuki T, Kuwabara K, Kohsaka S, Izawa Y, Sawano M, Takizawa T, Shoji S, Katsumata M, <u>Sugiyama D</u> , Okamura T, Takebayashi T. Cardiovascular Risk of Alcohol Consumption due to Renal Impairment: A 10-Year Prospective Study in a Community-Dwelling Japanese Population. J Atheroscler Thromb. 2026 Mar 4. doi: 10.5551/jat.65989.		

氏名：鈴木 美穂	職位：教授	分野：基礎看護学
2025 年度の研究活動の概要： - 医療者のコンピテンシーを行動から定義することを目指した画像解析のための基礎研究として、集中治療室における術後患者にかかわる医療者の言動に関する動画の質的分析を継続して進めた。 - 慶應義塾大学病院看護師とともに、造血幹細胞移植を受ける患者への看護に関して、①HHV-6 脳炎発症患者と非発症患者の症状に関する看護師の記述と、②経口摂取と臨床転帰との関連について、後ろ向きカルテ調査を行った。		
キーワード： ナースプラクティショナー、画像解析、造血幹細胞移植		
研究業績・活動 【論文】 Shimizu Y, <u>Suzuki M</u> , Niino M, Hori M, Shimazu T. Evidence-based nursing care practice for chemotherapy-induced symptomatic adverse reactions in Japanese hospitals: a cross-sectional study focusing on chemotherapy-induced skin toxicities, peripheral neuropathy, and fatigue. Supportive Care in Cancer, 33(12):1096-1096, 2025. Kanno Y, Nakano K, Kajiwarra K, Kobayashi M, Morikawa M, Matsuda Y, Shimizu Y, Niino M, <u>Suzuki M</u> , Shimazu T. Nursing Support for Nonpharmacological Interventions to Prevent Delirium in Patients with Cancer: A Scoping Review. Journal of palliative medicine, 2025. doi: 10.1089/jpm.2024.0321 【学会発表】 斉藤忍、鈴木美穂、森一直、黒澤昌洋. 集中治療室における術後患者にかかわる診療看護師(NP)の言動に関する動画の質的分析. 第 45 回日本看護科学学会学術集会. 2026. 新潟 清水陽一、鈴木美穂、新野真理子、堀芽久美、島津太一. がん薬物療法に伴う副作用症状に対してエビデンスに基づいたケアを臨床において実装する際の促進・阻害因子の検討. 第 40 回日本がん看護学会学術集会. 2026. 大阪 中里雅子、金高万莉、星瑠衣華、良塚由花、鈴木美穂、増田恭子、櫻井政寿、藤田志保. 臍帯血移植患者における HHV-6 脳炎診断前に看護師が捉えた症状に関する後ろ向きカルテ調査:非発症患者との比較. 第 48 回日本造血・免疫細胞療法学会総会. 2026. 東京 服部渚沙、小澤美悠、藤田志保、北野絵美、島崎夏帆、長谷川祐衣、大内彩友美、中里雅子、鈴木美穂. 同種造血幹細胞移植患者における治療期間中の経口摂取の有無と臨床転帰との関連：後ろ向きカルテ調査. 第 48 回日本造血・免疫細胞療法学会総会. 2026. 東京 【講演】 <u>Suzuki M</u>. Emerging Trends in Oncology Nursing: Advancing Research, Evidence-Based Practice, and Innovation. The 7th Asian Oncology Nursing Society. 2025. Manila, Philippines.		

氏名：田口 敦子	職位：教授	分野：地域看護学分野
2025 年度の研究活動の概要： 1. PHR (Personal Health Record) 活用による自治体保健師マネジメントツールの開発 2. ライフヒストリー法による援助要請を行わない地域在住高齢者への社会的孤立予防策の探求 3. A 市 B 区との事業者・地域・大学等と連携した食環境づくり		
キーワード： 1. PHR (Personal Health Record)、自治体保健師 2. 援助要請、ライフヒストリー 3. 食環境づくり、食品摂取多様性		
研究業績・活動 【1. PHR を活用した自治体保健師マネジメントツールの開発】 住民の健診データや保健師活動記録を蓄積・活用することにより、保健師活動の質を評価し、その結果を活動改善へ還元することを目的として、保健師活動マネジメントツールの開発を進めている。本ツールを全国自治体へ普及させることで、保健師活動の質の標準化や自治体間連携の促進に寄与することが期待される。 2025 年度は、ツールに搭載する標準化用語の精緻化を進めるとともに、実装を見据えたインターフェイスの改良を行った。今後はベータ版の実装に向けた検討を進め、協力自治体との具体的な協議を行う予定である。 【2. ライフヒストリー法による援助要請を行わない地域在住高齢者への社会的孤立予防策の探求】 本研究は、援助要請を行わない高齢者の人生過程において、その状況に至る心理的要因を明らかにするとともに、身体的・精神的問題が生じた際に発せられる微細な援助要請の兆候を明らかにすることを目的としている。本研究における「援助要請を行わない高齢者」とは、「高齢者の身体的・心理的問題に対し、専門職がサービス利用の必要性を判断したにもかかわらず、本人の受け入れが得られなかった者」と定義した。 2025 年度は、5 名のライフヒストリー分析を進めるとともに、インタビュー対象者を拡充するため、5 か所の地域包括支援センター等の協力を得て、過去 2 年半の相談記録から該当者の抽出を行った。2026 年度は、これらの対象者を基にさらなるヒアリング調査を実施する予定である。 【3. A 市 B 区における食環境づくりの推進】 A 市 B 区では、意識調査等から、食事バランスの偏りや野菜摂取不足など、区民の食生活に悪化傾向がみられている。そこで、A 市健康づくり計画に基づき、「健康寿命の延伸」を目指し、誰もが自然にバランスの良い食事を選択できる持続可能な食環境づくりを推進している。 本研究では、事業者・地域・大学等と連携し、地域の食環境改善に取り組んでいる。特に、区内 20 か所で展開されている移動販売に着目し、2023 年度にはモデル地区 2 か所を対象として、食生活と健康に関する実態調査およびバランスの良い食習慣に関する		

啓発活動を実施した。さらに 2024 年度には、対象を 3 か所に拡大し、10 食品群「さあにぎやかにいただく」のポスター掲示や商品コンテナへのポップ掲示を行うとともに、移動販売事業者と連携した推定野菜摂取量測定（ベジチェック®）等の健康測定会を開催した。

2025 年度は、これらの取組の効果を明らかにするため、移動販売利用者および移動販売を支えるボランティアへのインタビュー調査を実施した。その結果、ボランティアにおける食事や食環境に対する意識向上が確認された。

【原著論文・短報】

Yui Fukuda, Atsuko Taguchi, Akane Futami, Yusuke Umegaki, Pham Nguyen, Quy Toshihiko, Nakajima Akihito, Uezato. Help-seeking for depression among Vietnamese migrant workers in Japan and factors related to their intentions to seek help from a psychiatrist: a cross-sectional study. BMC Public Health. 2025;25:359. DOI: 10.1186/s12889-025-21615-9

Eiki Akatsuka, Atsuko Taguchi, Shoko Miyagawa, Daisuke Sugiyama. Development of a digital health competency scale for public health nurses. International Journal of Medical Informatics. 2025; 204: 106076
doi.org/10.1016/j.ijmedinf.2025.106076

大澤まどか、赤塚永貴、田口敦子、石川志麻、平野優子、加藤由希子、吉田裕美、阿蘇瑞季、岸下洸一朗、高山公子、柳町純子、水流聡子。母子保健における ICT を活用した保健師活動マネジメントツールの開発におけたコンテンツの作成。日本臨床知識学会誌。2025;6

https://drive.google.com/drive/folders/1CjR9PUxamRXqv9PmiQwG_PZwlcK52lQa

赤塚永貴、田口敦子、吉田知可、宮川祥子、杉山大典。保健師活動における ICT 活用およびデジタル化の実態と課題：地方自治体の統括保健師を対象とした全国調査。日本公衆衛生雑誌。2025, 72 (9) : 606-615

吉田裕美、田口敦子。特定保健指導に繰り返し参加している壮年期男性の行動変容を促す保健師の支援内容－積極的支援の初回面接に焦点をあてて－。日本地域看護学会誌。2025;28 (2) : 22-30

井口理、田口敦子、佐藤太地、岩本萌、奥田博子、望月宗一郎、嶋津多恵子、曾根智史、前田香、室岡真樹、持田恵理、大森純子。COVID-19 対応を経た行政保健師の離職意図：10 年前との比較 公衆衛生看護のあり方に関する委員会 2022/2023 調査報告 日本公衆衛生雑誌。2025. 72(11) : 897-904

氏名：辻 恵子	職位：准教授	分野：母性看護学・助産学
2025 年度の研究活動の概要： 1. 不確実性や倫理的ジレンマを孕む課題に取り組む助産師のネガティブ・ケイパビリティ（NC）の解明 → 分野横断的に概念の使用方法を概観した。看護・医療保健・福祉の分野における概念の使用方法に特化して概念分析を開始した。 2. チームの納得を促進するための看護師のコーディネート力向上プログラムの開発・評価→プログラムの実施と評価と一部コンテンツに関する RPG の開発に着手した。		
キーワード： Negative Capability、助産師、周産期遺伝看護、Shared Decision Making、調整力		
研究業績・活動 【学会発表】 高橋愛海，近藤奏，白石茉莉奈，龍見夏菜子， <u>辻恵子</u> ，杉本なおみ（2025）：全国自治体子宮頸がん検診案内ウェブサイトの理解しやすさ・行動しやすさの評価「コミュニティ・コンパス」活用に向けた基礎調査-。日本ウーマンズヘルス学会誌.24（1）14. Ozasa, Yuka; Woojung, Shin; Kyoko, Obama; <u>Keiko, Tsuji</u> : The Challenge of Genetic Nursing Applied to Plays. 2025 International Society of Nurses in Genetics (ISONG) World Congress. November 13-16, 2025, Montreal, Canada. 【その他】 青木美紀子， <u>辻恵子</u> ，小野伊久美，大西涼子，佐々木亜希子（2025）：遺伝看護の智を可視化するー実践を語り理論でつなぐ.第 24 回日本遺伝看護学会学術大会抄録集,Page27（2025.9.東京） 飯岡由紀子， <u>辻恵子</u> ，渡邊恵，杉本知子（2025）：臨床における”看護職の調整力“を考える.第 29 回日本看護管理学会学術集会講演集,Page46（2025.8.札幌） 飯岡由紀子， <u>辻恵子</u> ，渡邊恵（2025）：看護のコンピテンシー：看護師の調整力とは.第 45 回日本看護科学学会学術集会抄録集,Page128（2025.12.新潟） 【社会活動】 日本遺伝看護学会：学会誌 編集委員会委員，渉外委員会副委員長，査読委員 第 23 回日本遺伝看護学会学術大会 企画委員 日本助産学会：学会誌査読委員，第 38 回学術集会査読委員 聖路加看護学会：学会誌査読委員		

氏名：永田 智子	職位：教授	分野：在宅看護学
2025 年度の研究活動の概要： 自身が主導する研究活動のうち、在宅療養支援・療養場所の移行支援に関しては、ケースメソッドを用いた事例検討の実施に向け、慶應ビジネススクールによるケースメソッド教授法セミナーの受講、対象フィールドの調整などを行った。 また、COI-NEXT の「デジタルケアノート」プロジェクトにおいては、昨年度の訪問看護師および療養者への調査に基づく研究発表を実施した。在宅療養者向けのアプリ開発のプロジェクト自体はフィールド調整に時間を要し、2025 年度は進捗していない。 その他、分担研究者・研究協力者として複数のプロジェクトに関与している。		
キーワード： 退院支援、移行期支援、在宅看護、訪問看護		
研究業績・活動 【論文】 Natsuki Yamamoto-Takiguchi, <u>Satoko Nagata</u> . Factors Influencing Psychological Safety Among Japanese Home Care Nurses. Home Health Care Management & Practice, 38(2), https://doi.org/10.1177/10848223251331132 【学会発表】 水井翠，山本なつ紀， <u>永田智子</u> （示説）．在宅におけるセルフモニタリング記録の実際：在宅療養者と介護者の比較．第 28 回日本地域看護学会学術集会，日本赤十字看護大学，東京都，2025 年 9 月 6 日 <u>永田智子</u> （示説）．退院支援カンファレンスへの家族・地域ケア提供者の参加ー新型コロナウイルス感染症流行期間における全国調査ー．第 30 回日本在宅ケア学会学術集会，千里ライフサイエンスセンター，大阪府，2025 年 9 月 13 日 佐藤伊織，河野禎之， <u>永田智子</u> ，渡邊照美，松澤明美，藤岡寛，涌水理恵（口演）．ケアラーのエンパワメントを促進するリモートケアシステムへの登録・利用の効果中間報告．第 32 回日本家族看護学会学術集会，札幌市教育文化会館，北海道，2025 年 9 月 Natsuki Yamamoto-Takiguchi, Mizui Midori, <u>Satoko Nagata</u> (poster). Exploring the Use of Self-Monitoring Data in Japanese Home Care Nursing Agencies. APHA 2025 Annual Meeting and Expo. Walter E. Washington Convention Center. Washington DC, USA, 2025 年 11 月 Mizui Midori, Natsuki Yamamoto-Takiguchi, <u>Satoko Nagata</u> (poster). Exploring the willingness to use a self-monitoring and data-sharing application for home care patients. APHA 2025 Annual Meeting and Expo. Walter E. Washington Convention Center. Washington DC, USA, 2025 年 11 月 【書籍】 永田智子（分担執筆）．第 11 章 入退院支援・在宅ケアシステムと地域看護活動．地域看護学：Theory and Practice of Community Health Nursing（荒木田美香子・五十嵐歩・田高悦子編著）．249－269，2026		

永田智子（分担執筆）．地域社会と地域保健．辻一郎（監修）．シンプル衛生学公衆衛生学 2026, 221-226, 2026

【社会貢献活動】

- 藤沢市地域の縁側「もののきの家」における「慶應大学看護医療学部在宅看護プレゼンツ 一緒に考える健康な暮らし」シリーズの企画（山本なつ紀先生、水井翠先生とともに）

氏名：バティ, アーロン	職位：教授	分野：自然言語
2025 年度の研究活動の概要： ● 構成応答式第二言語語彙テストの採点における大規模言語モデル（LLM）の活用に関する研究を実施し、論文を公表 ● 英語接辞の難易度に関する研究を継続 ● 映像媒介型第二言語リスニングテストにおける非言語的コミュニケーション手がかりへの注意について、項目タイプ（implicit・explicit）の観点から論文を公表 ● 言語評価研究コミュニティにおいて活動を継続		
キーワード： 応用言語学、言語試験、第二言語語彙、多層ラッシュモデル		
研究業績・活動 【研究活動】 ● 英語接辞の難易度に関する研究を継続 ● <i>Language Testing</i> および <i>Language Assessment Quarterly</i> の編集諮問委員を継続務めた ● International Language Testing Association (ILTA) の Best Article Award 委員を務めた 【研究成果物】 Batty, A. O. (2025). Attention to visual cues in explicit and implicit item types on video L2 listening tests: An eye-tracking study. <i>Language Assessment Quarterly</i>, 22(4-5), 538-554. https://doi.org/10.1080/15434303.2025.2596376 Stewart, J., Anthony, L., Batty, A. O., Nakamura, K., Nicklin, C., McLean, S., & Tomaru, K. (2025). Can we reliably score meaning recall vocabulary tests using AI? A comparison of human vs. AI scoring. <i>Computer Assisted Language Learning</i>, Advance online publication. https://doi.org/10.1080/09588221.2025.2481397		

氏名：平野 優子	職位：助教	分野：地域看護
2025 年度の研究活動の概要： 1. 侵襲的人工呼吸器装着 ALS 患者と家族ペアでのライフ経験把握とレジリエンス促進要因の探索に関する研究（科研費基盤 C）：調査とデータ分析、報告書作成、学会発表 2. COVID-19 感染症流行下の母親の妊娠期から子育て期の経験とレジリエンス促進要因の解明に関する研究（福澤基金）：データ分析、報告書作成、学会発表、論文執筆 3. ライフヒストリー法による援助要請しない地域在住高齢者への社会的孤立予防策の探求（科研費萌芽研究：田口敦子教授代表）：調査とデータ分析、文献検討、結果報告 4. 大規模団地における VUCA 時代の全世代対応型孤立化予防研究（科研費基盤 C：石川志麻専任講師代表）：文献検討、学会発表 5. A 自治体の事業者等と連携した食環境づくり（委託研究：田口敦子教授代表）：フィールド活動、調査とデータ分析、ワークショップ開催、文献検討、学会発表、報告書作成 6. B 企業の若手社員の休職・離職予防と働きやすい職場環境づくりに関する研究（共同研究：田口敦子教授代表）：調査とデータ分析、報告書作成、学会発表準備、論文執筆		
キーワード： ライフ，ライフ・ライン・メソッド，ポジティブ心理学，レジリエンス，侵襲的人工呼吸器，筋萎縮性側索硬化症，母親，高齢者，食環境，職場環境，援助要請		
研究業績・活動 【論文】 他、共著 1 件 Hirano Y. The life experiences of patients with ALS on invasive positive-pressure ventilation via tracheostomy: A longitudinal study using the life-line interview method to ascertain psychological changes and related factors over a 14-year period that included the COVID-19 pandemic. The Japanese Society of Health and Human Ecology. 2025; 91(3) :71-85. 平野優子，石井忍. 新型コロナウイルス感染症拡大下における妊娠期から育児期の母親の心理的变化とその要因，およびレジリエンスによる重みづけ：ライフ・ライン・メソッドを用いた検討. 日本公衆衛生雑誌. J-STAGE 早期公開 【学会発表】 他、共著 2 件 平野優子，秋山美紀，大生定義. 人工呼吸器装着 ALS 患者と家族の発症から現在までの心理的变化の差異に関する一考察. 第 28 回日本地域看護学会学術集会; 2025sep6-7; 東京. 平野優子，石井忍. COVID-19 感染流行下における母親の妊娠期から子育て期の医療・福祉職の支援的対話者の有無による心理的・身体的健康度およびレジリエンスの違い. ヘルスコミュニケーションウィーク；2025 Oct4-5；東京.		

平野優子，秋山美紀，大生定義．離島で暮らす人工呼吸器装着 ALS 患者と家族の発症後の心理的变化と要因．第 84 回日本公衆衛生学会総会；2025 Oct29-31；静岡．

平野優子．子どもを育てながら暮らす人工呼吸器装着 ALS 患者と配偶者ペアでの発症後の心理的变化と要因．第 14 回日本公衆衛生看護学会学術集会；2025 Dec13-14；石川．

【書籍】

平野優子：第Ⅲ部現場で活かす心理的安全性 第 6 章さまざまな場における心理的安全性
2. 行政保健師 In 秋山美紀他編：看護のための心理的安全性．弘文堂．2025. pp174-187.

【社会貢献活動】

日公衛誌査読委員，日本公衆衛生看護学会実践ガイドライン委員

氏名：深堀 浩樹	職位：教授	分野：老年看護学、 家族看護学、看護管理学
2025 年度の研究活動の概要： 高齢者施設におけるケアの質の改善を目指した研究を主としつつ、在宅ケア教育における Virtual Reality の活用、看護学におけるデータベースの利活用、作業療法領域の研究者との共同研究などに学際的、国際的に取り組んだ。 1. <u>高齢者設・住まいにおける避けられる救急搬送・入院を削減する複雑介入の開発</u> 研究代表者である科学研究費補助金基盤研究(B)「の最終年度として、作成した介入ツールの実現可能性を検討する認知インタビューの解析、一部ツールの学会発表に取り組んだ。 2. <u>海外の医療系学生・医療者を対象とする日本在宅ケアの仮想現実教育プログラムの開発</u> ファイザーヘルスリサーチ振興財団 2024 年度研究助成（国際共同研究）により、医療的ケア児への訪問看護を体験できる仮想現実教育（VR）教材を開発し、看護医療学部における教育に活用した。教育の効果について評価するための質問紙調査のデータを収集し、解析を開始した。 3. <u>看護学生の AI 活用に関する国際的調査</u> シンガポール国立大学の研究者（Dr. Shefaly Shorey）からのオファーを受け、東南アジア・東アジアの看護学生を対象とした AI の活用に関する国際的調査のデータ収集を行った。 4. <u>看護学におけるデータベース構築・利活用に関する調査</u> 看護に関するデータベース及びデータサイエンス人材に求められる要件及びニーズに関する調査の解析を行い、複数の学会発表を行った。 5. <u>入院中高齢者への回想法を用いた絵本読み聞かせの実装に向けたパイロット研究</u> 「看護学生ボランティアによる絵本を用いた高齢者支援」をテーマに、研究体制の構築および研究計画の立案を行った。まずは小規模なパイロット研究として実施する方針を定め、研究協力施設と協議を行い倫理審査申請の準備を進めている。 6. <u>災害支援における医療・ケア記録活用に向けたデータ基盤構築</u> 減災ケア情報学ラボのメンバーとして、能登半島地震における 1.5 次避難所での医療・ケア記録のデータ分析に向けた枠組みの検討に参加した。能登半島でのフィールドワークに参加し、行政、支援団体および介護事業者等へのヒアリングや、記録フォーマットの予備的分析を行った。 7. <u>その他の研究</u> その他、国内外の共同研究者や健康マネジメント研究科看護学専攻で後期博士課程の大学院生との研究として、療養病床における食支援プログラムの開発、高齢者施設におけるケアの質改善介入開発のための基礎的研究、高齢者に対する身体拘束縮小戦略の検討、認知症の人の家族介護を行っている移民の方の経験に関する研究などを行っている。また、特別招聘教授（国際）の制度を活用して、喜吉テオ紘子氏（米国）、Max Topaz 氏（米国）らと共同研究の可能性を検討し、レター論文の執筆に取り組んでいる。		

キーワード：

高齢者ケアの質改善、高齢者施設・住まい、回避可能な救急搬送、Virtual Reality

研究業績・活動

【論文】

査読有りの論文としては、3編を公表した（うち2編は Corresponding Author）。講評数は少ないもの、それぞれ看護医療学部卒の卒業生が在学中の4年次に実施した研究、健康マネジメント研究科看護学専攻の後期博士課程に在籍中の学生による研究、作業療法士の研究者との共同研究が含まれ、若手研究者の育成と学際的研究の促進に貢献できた点は評価できる。

【学会発表】

看護におけるデータベースの利活用、高齢者施設・住まいにおける複雑介入に関する学会発表を行った。

【書籍】

本学部の老年看護学教育に活用している「最新老年看護学 第4版（2025年版）の編集を行った。「ホスピス緩和ケア白書 2026 認知症の人の緩和ケア」において、「認知症ケアの潮流」の執筆を担当した。

*論文や学会発表等の研究業績の書誌事項等は researchmap の深堀の個人ページ (<https://researchmap.jp/hfukahori/misc>) をご参照ください。

【研究活動の客観的評価と今後の展望】

2024年度より、海外の看護学研究者との交流から国際的な看護学研究者のコミュニティで、文献引用数に基づく客観的評価が一定程度重視されているとの示唆を得て、研究活動の客観的評価を自己の研究活動の振り返りに試験的に活用している。

2025年5月時点（本稿提出）での研究活動の客観評価として、Scopus(Elsevier)によると、h-index:16（2024年度は15）、文献数:73編（同70編）、被引用数:816（同635）、Co-authors:215人（同206人）、被引用数トップ25%文献:22.2%（同21.8%）、トップ25%ジャーナル掲載文献:59.6%（同60.4%）、であった。SciValによる研究テーマの上位3つはNursing 64.8%（同65.5%）、Medicine 38.9%（同38.2%）、Social Science 9.1%（同9.1%）であった。医学中央雑誌によると原著論文に限定した論文数は55編で2024年度から変化がなかった。

学術論文の公表の状況は芳しくないと感じており、2026年度は2025年に研究計画の立案やデータ収集を行った活動の公表を目指していきたい。一方で、前述のように若手研究者の育成と学際的研究の促進に貢献できた点は評価できる。

客観的評価を意識しつつも、過度に振り回されることなく、看護学の専門性を重視した、様々な垣根を超え自由に発想した、社会と未来に貢献する研究活動として、高齢者施設・住まいのケアの質向上を目指した研究を軸としつつ、多様な共同研究者と共に様々なフィールドで研究に取り組んでいきたい。

氏名：藤井 千枝子	職位：教授	分野：看護・医療統合
2025 年度の研究活動の概要： STEAM と ELSI を両輪とした先端看護学の進展に向けて ・ パーキンソン病患者の療養支援 ・ 医療安全（外来化学療法における適正配置、臨床と教育の協働、心理的安全性、ピアバイオレンス、医療機器や福祉用具の安全活用と危険予知、環境整備 等） ・ 医療・介護テクノロジー（福祉工学、ケア工学、生活支援工学）と身体知 ・ 看護教育および看護技術教育の新たな科学教材の開発		
キーワード： 先端看護学、医療安全、福祉工学、STEAM（Science, Technology, Engineering, Arts and Mathematics）、ELSI（Ethical, Legal and Social Issues）		
研究業績・活動 【論文】 Fujii C. A Qualitative Exploratory Study of Patient Safety and Nurses' Body Awareness Using Motion-Capture-Linked Avatars. Journal of Nursing Management. 2026(1): e9415472. PMID: 41887198. DOI: https://doi.org/10.1155/jonm/9415472 Fujii C, Iwasa Y. Implications of Nursing Peer Violence on Patient Safety: An Integrative Review. International nursing review. 2025 Sep;72(3): e70042. PMID: 41887198. DOI: 10.1111/inr.70042. 藤井千枝子, 橋谷典子. 医療機器・福祉機器や福祉用具の利用における危険予知に関する語の抽出. 医療機器学 95 (6) . DOI : 10.4286/jjmi.95.593 【解説】 藤井千枝子. 「心理的安全性」を担保する職員への医療安全教育 心理的安全性が保たれた職場ではピアバイオレンスは予防できる. 看護展望 50 号(14) 藤井千枝子, 三浦桃子. 「ベッド」の現況とあるべき姿への考察 改めて、病院の必須インフラとしてのベッドを考える 医療安全視座から考えるベッドと周辺の環境整備 その改善と発展の方向性とあるべき姿. 新医療 52 号(11) 藤井千枝子. 看護部会紹介. 医療安全学会 20 号 【シンポジウム・学会発表】 ・ 日本臨床腫瘍学会合同シンポジウム. 令和時代の外来がん化学療法の看護：医療安全学会看護部会の取り組みとしての外来化学療法、シンポジスト ・ 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会、OS「福祉工学・ケア工学」企画・運営、共著者として 3 件報告 【掲載・その他】 ・ Care Net：日本医療安全学会・全国老人保健施設協会・日本慢性期医療協会合同医療・介護施設従事者のための転倒・転落事故へのアプローチ. 転倒・転落予防策(1)(2)環境整備 ・ 研修企画・講師等：医療安全学会. 医療安全管理者養成研修等 ・ 査読：生活支援工学、BMC Nursing, Nursing Forum, J of Nursing Measurement 等		

- 委員：2025 年度 AMED 課題評価委員（介護テクノロジー社会実装のためのエビデンス構築事業、介護 DX を利用した抜本的現場改善事業）

氏名：藤屋 リカ	職位：准教授	分野：グローバルヘルス
2025 年度の研究活動の概要： 慢性的な紛争下で生きる青少年のヘルスリテラシー向上：混合研究法による教育ツール開発（基盤研究 B）を 4 年計画の 3 年度として研究に取り組んだ。UNICEF の MULTIPLE INDICATOR CLUSTER SURVEYS (MICS) データを用いた共同研究の結果をまとめた。また、ケニアとカンボジアにおいて Photovoice 法を用いた研究を実施し、ザンビアにおいても取り組み始めた。		
キーワード： ヘルスリテラシー、学校保健、母子保健、リプロダクティブヘルス、プライマリーヘルスケア、健康格差の是正、パレスチナ、Photovoice 法		
研究業績・活動 【論文】 Wakabayashi N, Sarhan MBA, <u>Fujiya R</u> , Sugiyama D, Fuse R, Hammoudeh W, Ghandour R. Premenstrual syndrome and its association with exposure to political violence, human insecurity, and well-being: a cross-sectional study among Palestinian adolescent refugees. Reprod Health. 2025 Nov 27;22(1):243. doi: 10.1186/s12978-025-02104-z. Sarhan MBA, <u>Fujiya R</u> , Kiriya J, Shibnuma A, Giacaman R, Jimba M. Health literacy mediating the association between health information sources and oral health knowledge among Palestinian adolescent refugees: a cross-sectional study. BMC Oral Health. 2025 Apr 25;25(1):636. doi: 10.1186/s12903-025-05836-3. PMID: 40281439; PMCID: PMC12023511. 【学会発表】 シンポジウム <u>藤屋リカ</u> 、慢性紛争下にあるパレスチナの青少年のヘルスリテラシー「世界における若者の健康の現状と課題：Post SDGs に向けて」、第 40 回日本国際保健医療学会学術大会、東京、2025 年 11 月。 口頭発表 武居祐未、 <u>藤屋リカ</u> 他、Exploring Mental and Psychosocial Health of Palestinian Adolescents in the West Bank and its Associated Factors With a Focus on Exposure to Violence、第 40 回日本国際保健医療学会学術大会、東京、2025 年 11 月。 【社会貢献活動】 ● 日本国際保健医療学会常任理事 ● 認定 NPO 日本国際ボランティアセンター理事 ● パレスチナ学生基金理事。		

氏名：細坂 泰子	職位：教授	分野：母性看護学・助産学
2025 年度の研究活動の概要： 1. 国際・学際横断的連携による虐待に移行させない子育て支援モデルの構築 日本と英国でのインタビュー調査・データ分析を行い、日英データの近似点、相違点を抽出した。文化的な背景や子育てに対する意識、虐待に対する親世代の感受性などと検討した。2025 年度は国際学会で口頭発表を行った。論文投稿中。 2. 医療介入のある経膣分娩におけるポジティブな出産体験 WHO が推奨するすべての産婦にとってのポジティブな出産体験を、今後ますます増加すると考えられる無痛分娩等の医療介入がある分娩にとっても必要だと考え、産婦の主体性の観点から質的に分析した。2025 年度は学会発表を行い、原著論文として受理された。 3. 子どもの体験格差 子どもたちの成長に不可欠な体験機会に不平等が生じている現象は「体験格差」として認識され、重要な社会問題として注目されている。これらの体験格差が未就学児に与える非認知能力に与える影響を介入研究で評価することを目的としている。2025 年度は研究計画を検討し、2026 年度に実施予定。		
キーワード： 子育て支援、しつけと虐待の境界、子どもの体験格差		
研究業績・活動 Hososaka, Y., Horii, M., Rooksby, M., Kayashima, K. (2025/8/9) Maternal Understanding of What Counts as (In)appropriate Discipline for Pre-school Children. 10th Anniversary International Conference of International Academy of Family Psychology (宮城県仙台市) 三原郁奈、細坂泰子 (2025/10/11) 医療介入のある経膣分娩におけるポジティブな出産体験-産婦の主体性に焦点を当てて-. 第 66 回日本母性衛生学会総会・学術集会 (東京都 新宿区) 細坂泰子 (2025/10/17) 男子高校生が知るべき女性のからだ講座. 慶應義塾高等学会 塾高生のための保健講座		

氏名：真志田 祐理子	職位：助教	分野： 老年看護学
2025 年度の研究活動の概要： 2025 年度は、高齢者の価値観共有ツールおよび介護・看護職連携支援ツールの開発、高齢者の生きがいを支援するテクノロジー利用ニーズに関する研究、在宅ケア仮想現実教育プログラムの開発、1.5 次避難所における医療・ケア記録活用に向けたデータ基盤構築などの研究活動を進めるとともに、多世代共創型プロジェクトを立ち上げ、地域の高齢者と学生が交流できる場づくりに取り組んだ。 1. <u>複数の慢性疾患を抱える高齢者の価値観共有ツールの開発</u> 「What Matters Most Structure Tool」日本語版試案を作成し、文化的・認知的妥当性を検証するため高齢者を対象に認知デブリーフィングを実施した。その結果を踏まえ文化的背景による解釈の相違や項目の重複を整理し、日本の高齢者にとって理解しやすく価値観を反映しやすい表現への修正を進めている（科学研究費助成事業若手研究）。 2. <u>高齢者の生きがいを支援するテクノロジー利用ニーズの類型化</u> 高齢者のテクノロジー利用ニーズと生きがいとの関連を明らかにすることを目的に、65 歳以上の高齢者 1,000 名を対象にオンライン調査を実施した。その結果、健康管理・安全確保・情報検索などの機能への関心が高い一方、最も利用したい機能は分散しており、高齢者のニーズは多様であることが示唆された（慶應義塾学事振興資金）。 3. <u>高齢者施設における看護職・介護職連携促進ツールおよび ACP 支援ツールの開発</u> 研究分担者として、高齢者施設・住まいにおける回避可能な救急搬送・入院の削減を目的とした研究に携わった。入居者の体調不良時における介護職・看護職の連携促進ツールを作成し、有用性・実行可能性を検討するため高齢者施設職員を対象に認知インタビューを実施した。また、本人・家族向け ACP 支援ツールを作成し、高齢者施設におけるツール活用の可能性や現状の課題についてヒアリングを行った。 4. <u>海外医療系学生・医療者向け日本在宅ケア仮想現実教育プログラム開発</u> 共同研究者として、医療的ケア児への訪問看護場面を題材とした Virtual Reality 教材の作成に取り組んだ。2025 年度国際看護実践Ⅰ（国内）で活用し、日本における在宅看護や多職種連携について学ぶ教材として高評価を得た。 5. <u>看護学におけるデータベース構築・利活用に関する調査</u> 共同研究者として、看護に関するデータベース及びデータサイエンス人材に求められる要件及びニーズに関する調査に携わった。本研究の成果を踏まえ、2025 年 11 月に「看護学領域でデータベースの利活用・構築を促進するための提言」が公表された。 6. <u>入院中高齢者への回想法を用いた絵本読み聞かせの実装に向けたパイロット研究</u> 今年度は「看護学生ボランティアによる絵本を用いた高齢者支援」をテーマに、研究体制の構築および研究計画の精緻化を行った。まずは小規模なパイロット研究として実施する方針で研究協力施設と協議を行い倫理審査申請の準備を進めている。		

7. <u>1.5 次避難所の医療・ケア記録活用に向けたデータ基盤構築</u> 減災ケア情報学ラボのメンバーとして、能登半島地震における 1.5 次避難所における医療・ケア記録のデータ分析に向けた枠組みの検討に参画した。能登半島でのフィールドワークに参加し、行政、支援団体および介護事業者等へのヒアリングを通じて、記録フォーマットの実態を確認し、予備的分析の妥当性を検証した。 8. <u>多世代共創型プロジェクトの立ち上げ</u> 藤沢市内にある高齢者団体の協力のもと、2025 年 9 月に、高齢者と学生が健康や生活について意見交換を行う共創プロジェクトを立ち上げた。本活動を通じて、高齢者と学生がそれぞれの世代における流行や価値観、世代間交流の変遷について語り合う機会が増加した。相互理解が徐々に深まっており、現在も継続的に活動を実施している。 9. <u>その他の研究活動</u> 共同研究者として、看護学生の AI 活用に関する国際的調査のデータ収集や、認知症のある親を介護する移民家族の経験に関する研究、看護師が経験する Care Rationed or Missed に関する研究などに参画している。
キーワード： 高齢者、価値観、高齢者施設・住まい、Virtual Reality、世代間交流
研究業績・活動 【学会発表】 大河原啓文，<u>真志田祐理子</u>，松本佐知子，井上修一，宮下光令，宮川祥子，山川みやえ，深堀浩樹．(2025 年 12 月)．高齢者施設における人生の最終段階の救急搬送・入院に関する学習支援教材の開発．第 45 回日本看護科学学会学術集会． 横田慎一郎，友滝愛，深堀浩樹，<u>真志田祐理子</u>，秋元直子，宮川祥子，久貝波留菜，矢坂泰介，森田光治良，早尾弘子，中野夕香里，林田賢史，仲上豪二郎．(2025 年 12 月)．専門家ヒアリングに基づく看護領域での診療報酬・電子カルテ系データベース活用・構築に関する課題と方策．第 45 回日本看護科学学会学術集会． 深堀浩樹，友滝愛，横田慎一郎，<u>真志田祐理子</u>，秋元直子，宮川祥子，久貝波留菜，矢坂泰介，森田光治良，早尾弘子，中野夕香里，林田賢史，仲上豪二郎．(2025 年 12 月)．看護学領域でのデータベース利活用・構築の課題と促進方策：日本看護系学会協議会の所属学会へのウェブ調査．第 45 回日本看護科学学会学術集会． 友滝愛，横田慎一郎，深堀浩樹，<u>真志田祐理子</u>，秋元直子，宮川祥子，久貝波留菜，矢坂泰介，森田光治良，早尾弘子，中野夕香里，林田賢史，仲上豪二郎．(2025 年 12 月)．目的型レジストリの構築・利活用の現状と課題、及び、推進のための方策：専門家インタビュー．第 45 回日本看護科学学会学術集会． 【論文・寄稿】 <u>真志田祐理子</u>．(2025)．高齢者の価値観を尊重し、その人にとって「もっとも大切なこと」を支える看護をめざして．看護研究，58(6)，483-487． 【書籍】 水谷信子，水野敏子，高山成子（監修），三重野英子，會田信子，深堀浩樹（編集）．第 1 章 D 分担執筆：<u>真志田祐理子</u>，深堀浩樹．「最新老年看護学 第 4 版」（2025 年版）．日本看護協会出版会．

【その他】

- ふじさわシニア健康生活プロジェクトの立ち上げ（2025 年 9 月～2026 年 3 月、認定 NPO 法人湘南ふじさわシニアネットの協力を得て実施）
- 高齢者施設向け認知症 VR 体験会（エイジレス・アカデミー・ラボ企画）の実施（2026 年 3 月 25 日、3 月 30 日）

氏名：増田 真也	職位：教授	分野：ヒューマンケアリング
2025 年度の研究活動の概要： 2025 年度は、これまでの調査データを見直し、再分析をした。また来年度に実施する調査の準備を進めた。		
キーワード： ウェブ調査、回答の質、調査実験		
研究業績・活動 Ozaki, K., Hirota, A., Suzuki, T., Nakashita, A., Park, Y., & Masuda, S. (in press). Inattentive respondent detection methods for multiple-choice format items. Acta Psychologica, 増田真也・澁谷泰秀・村上史朗・吉村治正（2025）．性役割分業意識質問項目の測定誤差の実験的検討 日本心理学会第 89 回大会（東北学院大学，2025 年 9 月 5 日，ポスター発表）		

氏名：松崎 愛	職位：専任講師	分野：基礎看護学分野
2025 年度の研究活動の概要 1. 「危機的出血へ移行する可能性がある手術場面における熟練した器械出し看護師の思考過程に関する研究」のテーマで、2026 年度にデータ収集・論文化を目指して研究活動に取り組んでいる。 2. 2025EAFONS にてポスター発表を行った、「The utilization of active learning in nursing skills education on patients' daily living care for undergraduate students: A scoping review.」の論文化・投稿に向けて執筆中。		
キーワード 器械出し看護師、危機的出血、手術看護、生活援助技術、アクティブラーニング		
研究業績・活動 【社会貢献活動】 1. 横浜労災看護専門学校にて、第 1 回神奈川手術看護情報交換会開催。手術室中堅看護師から管理職を対象に「他職種との連携」「デジタルツールを用いた指導方法」「働きやすい環境づくり」の 3 テーマでの講演と手術看護の悩みを共有する場を提供するセミナーの企画・運営。主催：神奈川認定看護師会，開催日：2025 年 10 月。 2. 第 14 回神奈川手術看護セミナー開催(Web 形式)。手術室新人看護師を対象に、「外回り看護」「器械だし看護」「緊急時の手術看護」の 3 テーマでの講演を行い、手術看護の基礎について学べるよう、セミナーの企画・運営。主催：神奈川認定看護師会，開催日：2025 年 12 月。 3. 看護系動画サービスのメディカルオンラインにて手術看護分野の動画を作成・配信。動画タイトル「手術室入室受け入れ準備」「手術室入室確認事項（サインイン）」「手術台への臥床」「手術台でのモニター装着」他 20 件，2025 年 9 月公開。		

氏名：三浦 桃子	職位：助教	分野：基礎看護学
2025 年度の研究活動の概要： 尿道留置カテーテルはケアや管理において留意すべき点の多い看護技術の一つである。カテーテル関連尿路感染症などにより、患者の身体および療養に大きな影響を及ぼす恐れがあるため適切な管理が重要となる。そこで、安全に、かつ学習者一人ひとりのペースで反復練習が可能なスマートグラス教材の開発に取り組み、その成果を国内外の学会において発表した。教材開発および学会発表を通して得られた知見と課題をふまえて、来年度は教材の有効性評価や教育実践への適用に関する研究を進める予定である。		
キーワード： 看護技術，看護実践，AR 教材		
研究業績・活動 藤井千枝子， <u>三浦桃子</u> .(2025). 医療安全視座から考えるベッドと周辺環境整備. 月刊新医療, 52(11), 88-91. <u>三浦桃子</u> ，藤井千枝子，佐藤広隆，田仲浩平. (2025). スマートグラスを用いた尿道留置カテーテル安全管理教材の開発. 第 26 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会予稿集, 2453-2455, 2B1-08. <u>Miura, M.</u> , & <u>Fujii, C.</u> (2026). Development of Smart Glasses-Based Training Materials for Indwelling Urinary Catheters Focused on Infection Prevention. The 12th Asian Conference on Aging & Gerontology: Conference Programme & Abstract Book, 69, 105351.		

氏名：水井 翠	職位：助教	分野：在宅看護学分野
2025 年度の研究活動の概要： 1. 訪問看護ステーションにおける work-life culture に関する研究 Work-Life Culture Scale の日本語版作成に向けて、原版開発者の許諾を得たうえで翻訳・逆翻訳を行い、日本語暫定版を作成した。さらに、訪問看護師および関連分野の専門家を対象に認知的インタビューを実施し、項目の関連性、包括性、理解可能性を検討した。得られた結果をもとに日本語表現を修正し、今後の信頼性・妥当性検証に用いる尺度案を作成した。 2. COI-NEXT の研究 COI-NEXT の研究では、2024 年度に実施した在宅療養者、家族、訪問看護師を対象としたセルフモニタリングデータに関する研究成果を整理し、学会発表を行った。		
キーワード： 訪問看護、Work-Life Culture、セルフモニタリングデータ		
研究業績・活動 【学会発表】 水井 翠, 山本 なつ紀, 永田 智子 (2025) . 在宅におけるセルフモニタリング記録の実際：在宅療養者と介護者の比較. 日本地域看護学会第 28 回学術集会 Midori Mizui, Natsuki Yamamoto-Takiguchi, Satoko Nagata (2025) . Exploring the willingness to use a self-monitoring and data-sharing application for home care patients. American Public Health Association Annual Meeting 2025 Natuski Yamamoto-Takiguchi, Mizui Midori, Satoko Nagata (2025) . Exploring the Use of Self-Monitoring Data in Japanese Home Care Nursing Agencies. American Public Health Association Annual Meeting 2025 【社会貢献活動】 - 地域の縁側「もののきの家」での健康講座の企画・実施 地域住民が主体的に健康づくりに取り組むことを目的とした、全 3 回の健康講座を行った。地域住民の健康意識の向上と地域との交流促進に取り組んだ。 - コミュニケーションエイド講習会の企画・開催 ダブル技研株式会社の協力を得て、在宅ケア提供者向けに、コミュニケーションエイドの講習会を行った。		

氏名：三原 郁奈	職位：助教	分野：母性看護学・助産学
2025 年度の研究活動の概要： 2025 年度は医療介入のある経膣分娩に関する質的研究に関して学会での口頭発表を実施した。また、論文投稿に向けた準備を行った。		
キーワード： 医療介入、ポジティブな出産体験、主体性		
研究業績・活動 【学会発表】 <u>三原郁奈, 細坂泰子.</u> (2025) 医療介入のある経膣分娩におけるポジティブな出産体験 - 産婦の主体性に焦点を当てて -, 第 66 回母性衛生学会総会・学術集会, 東京都新宿区, 2025 年 10 月 10 - 11 日. 口頭発表.		

氏名：宮川 祥子	職位：准教授	分野：情報技術ほか
2025 年度の研究活動の概要： - 災害時の保険医療福祉支援における情報課題に関する研究 - 排泄ケアシミュレータの開発と社会実装に関する研究 - 保健師課程教育における GIS の活用に関する研究		
キーワード： ヘルスケア・防災・DX		
研究業績・活動 【論文】 Shoko Miyagawa, Sota Suzuki, Shizuka Watanabe, Zebing Mao, Young Ah Seong, Toshinori Fujie, Tatsuhiro Horii, Kenjiro Tadakuma, Koichi Suzumori, Hiroyuki Nabae, Shingo Maeda. “Soft Robotic Excretory Care Simulator for Nursing Education: Functional and Perceptual Biomimetics Approach.” Advanced Robotics Research, 2025 年 9 月 12 日. DOI: 10.1002/adrr.202400026 Zebing Mao, Sota Suzuki, Hiroyuki Nabae, Shoko Miyagawa, Koichi Suzumori, Shingo Maeda. “Machine learning-enhanced soft robotic system inspired by rectal functions to investigate fecal incontinence.” Bio-Design and Manufacturing, 8(3): 482-494, Zhejiang University Press, 2025 年 5 月 20 日. DOI: 10.1631/bdm.2400152 【講演・口頭発表】 「R6 能登半島地震にみる災害時健康支援の情報連携課題とその構造的要因」第 31 回日本災害医学会学術集会, 2026 年 3 月 19 日, 新潟. 「災害時の情報支援 ---被災者の生活再建・健康維持に求められる重層的情報マネジメントとは」日本地域看護学会第 28 回学術集会, 2025 年 9 月 7 日. (招待講演) 「災害看護教育の DX 推進」日本災害看護学会第 27 回年次集会, 2025 年 9 月 6 日. (指名シンポジウム) 【受賞】 Shoko Miyagawa, Yoko Hamadate. “The Best Paper Award” 受賞対象論文: “Design Requirements for Information Systems Supporting Health, Medical and Welfare Coordination During Disasters: Insights from Multi-layered Analysis.” The 10th IFIP WG5.15 Conference on Information Technology in Disaster Risk Reduction, 2025 年 10 月.		

氏名：山内 慶太	職位：教授	分野：健康科学・病態学
2025 年度の研究活動の概要： 主に以下に大別されます。 1. 大規模レセプトデータを用いた高額医療費の分析 2. 電子カルテデータ等の病院マネジメント向上への活用 3. 健保組合のデータ(特定健診、レセプト等)の健康経営への活用 4. 病院の組織管理に関する研究 5. 自殺対策 6. 公的統計ミクロデータの利活用に関する研究 7. 初等中等教育段階におけるデータサイエンス教育プログラムの開発 8. 慶應義塾史		
キーワード： ヘルスサービスリサーチ、メンタルヘルス、探索的データ解析		
研究業績・活動 【研究活動】 上記研究テーマの 1)～6)は私の研究グループで大学院の学生や修了者と共に行っているもので、そのうちの一部を以下に紹介する。 1～3)については、協会けんぽ(全国健康保険協会)の委託研究、土木健保との共同研究、JMDC から提供を受けたレセプトデータを用いた研究等を進めた。 4)については、主に職場の組織学習に注目して研究を展開している。 5～6)については、革新的自殺研究推進プログラム「ポストコロナの自殺対策に資する統計等のミクロデータ利活用推進に関する研究」の実績も踏まえて看護医療学部校舎に設置されたオンサイト拠点を活用した分析を進めた。また、JST の「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム:社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築」のプロジェクトとして岡檀君を研究代表者とする「行政・NPO の孤立・孤独対策現場知を支援する総合知に基づく学術体制構築」がはじまり、相互に連携しながら展開している。その一端として、12 月に金沢で開催された第 16 回横幹連合コンファレンスにおける「能登半島復興特別セッション『能登半島復興パネル討論会』」において、岡檀君、新井崇弘君、田上紀代美君の研究の知見を踏まえ「全体の平均では見えないー地域間での健康格差と文化の多様性ー」と題して報告した。 8)に関する地域貢献としては、中津市と慶應義塾で進めているプロジェクトに参画し、再生古地図「まち歩きマップー福澤諭吉が生きた幕末の中津を歩こうー」(紙版・オンライン版)等に協力して来たが、引き続き、歴史的まち並みを生かした魅力創出等の取り組みに協力している。その一環として、10 月に開催された「中津城下町まちなみシンポジウムー「つなぐ」まちなみ 「創る」まちなみ」の企画・実施に協力した。 【論文】 宗像舞, 渡辺真弓, 山内慶太. 資源としての職場学習が就業継続意欲に与える影響： 病院に勤務する看護師を対象としたマルチレベル分析. 日本医療・病院管理学会誌 62(2), 34-44, 2025.		

- Uchida J, Yamada M, Nagayama H, Tomori K, Ikeda K, Yamauchi K. Classifying Patient Characteristics and Determining a Predictor in Acute Stroke Patients: Application of Latent Class Analysis in Rehabilitation Practice. *Journal of Clinical Medicine* 14(15), 5466, 2025.
- Nomoto K, Inagaki A, Yamauchi K. Increased Antidepressant Prescriptions for Children and Adolescents with Major Depressive Disorder in Japan Based on a Claims Database. *Neuropsychiatric Disease and Treatment* 21, 2385-2400, 2025.
- Kishi T, Sato C. Yamauchi K, Clustering of health behaviors in male workers and comparisons of incidences of insomnia, sleep apnea, and depression between non-restorative sleep and restorative sleep. *Acta Psychologica*, 261, 2025.
- Arai T, Shinkai H, Yamauchi K. Temporal analysis of posts on a Japanese online message board for suicide risk monitoring. *BMC Psychiatry* 25(1), 1111-1120, 2025.
- 【発表[一部]】
- 松尾陽子、山内慶太. レセプトデータを用いた高額医療費患者の5年間医療費推移パターンの類型化. 第1回日本デジタル医学会 (第18回 旧 ITヘルスケア学会) 年次学術大会, 2025. (一般演題優秀賞)
- 【その他[一部]】
- 山内慶太, 六大学野球復活ではじまった戦後復興, 塾(327), 11, 2025.
- 山内慶太, 福澤諭吉をめぐる人々(その103) 雨山達也, 三田評論(1302), 74-77, 2025.
- 【講演[一部]】
- 山内慶太, 福澤先生の教育論—AI時代に益々大切な力—, 三田教育会総会, 2025.
- Yamauchi K, Lessons of Fukuzawa Sensei: Essential Competencies for the AI Era, An Omnibus “Tricultural” Lecture Series, 2026

氏名：山本 なつ紀	職位：専任講師（有期）	分野：在宅看護分野
2025 年度の研究活動の概要： 全国の訪問看護ステーションを対象にした Web 調査にて、インシデントの発生状況やステーションの特性などについて調査を実施するとともに、より良い安全管理体制構築に向けた要因についての検討を実施した。また、現場の実践者との事例検討会を通して、在宅ならではの転倒の特徴や学び、現場にとっての難しさの言語化を行うとともに、事例集作成に向けた構成概念の整理・検討を行った。		
キーワード： 訪問看護 患者安全 インシデントレポート 健康教育 事例検討		
研究業績・活動 【論文】 Yamamoto-Takiguchi, N., & Nagata, S. (2025). Factors Influencing Psychological Safety Among Japanese Home Care Nurses. Home Health Care Management & Practice, 10848223251331132. 【ポスター発表】 水井 翠, 山本 なつ紀, 永田 智子. 在宅におけるセルフモニタリング記録の実際：在宅療養者と介護者の比較. 第 28 回日本地域看護学会学術集会. 2025 年 9 月 6 日・7 日 前田 明里, 本田 千可子, 松本 博成, 城内 愛, 角川 由香, 山本 なつ紀, 吉岡 京子. 自治体が把握する訪問看護利用者の自宅内発生事故の報告内容と活用の実態. 第 84 回日本公衆衛生学会総会. 2025 年 10 月 29 日（水）～31 日（金） Mizui Midori, Natuski Yamamoto-Takiguchi, Satoko Nagata. Exploring the willingness to use a self-monitoring and data-sharing application for home-care patients. American Public Health Association Annual Meeting 2025. 2025 年 11 月 2 日～5 日 Natuski Yamamoto-Takiguchi, Mizui Midori, Satoko Nagata. Exploring the Use of Self-Monitoring Data in Japanese Home Care Nursing Agencies. American Public Health Association Annual Meeting 2025. 2025 年 11 月 2 日～5 日 【交流集会】 山本なつ紀, 角川由香, 野口麻衣子, 沼田華子, 前田明里, 山本 則子. 交流集会 5：現場の語りが繋ぐ学びの場 訪問看護のケアの質保証・向上に向けた自主的 Special Interest Group の取組み. 第 15 回日本在宅看護学会学術集会. 2025 年 11 月 29 日・30 日 【市民講座】 内山映子, 山本なつ紀. 2025 年度藤沢市民講座「誰もが自分らしく暮らせるまちへ：藤沢発・共生社会のつくり方—看護医療学部開設 25 周年に向けて—」第 3 回「地域と大学とで創るこれからのふじさわ」第 2 部：「社会的なつながりが与える影響」. SFC 万学博覧会 2025. 2025 年 11 月 23 日 【競争的研究費】		

訪問看護サービスの安全管理に係る多角的・科学的エビデンス構築。厚生労働省 厚生労働科学研究費補助金（長寿科学政策研究事業） ．課題番号 24GA1002（協力者から分担研究者に変更）

【社会貢献活動】

藤沢市地域の縁側「もののきの家」での地域住民を対象にした定期的な健康教室開催

氏名：新井 康通	職位：教授	分野：老年医学、健康長寿
2025 年度の研究活動の概要： ● 全国超百寿者調査：お元気な 100 歳以上の高齢者（百寿者）、105 歳以上の超百寿者を訪問して、健康長寿の秘訣を探る研究。 ● 川崎市元気高齢者研究（KWAP）：85-89 歳の自立した高齢者のコホート調査。介護予防、健康寿命の延伸につながる要因の解析。		
キーワード： 健康長寿、百寿者、元気高齢者、認知機能、バイオマーカー		
研究業績・活動 Shikimoto R, Sasaki T, Abe Y, Tai K, Hirose N, Okano H, <u>Arai Y</u> . Biomarkers, Cognitive Function, and Mortality in Centenarians. JAMA Network Open. 2026; 9(5), e2611335. Doi:10.1001/jamanetworkopen.206.11335. Nishimoto Y, Sasaki T, Abe Y, Hara N, Miyashita A, Konishi M, Eguchi Y, Ito D, Hirose N, Mimura M, Japanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative, Ikeuchi T, Okano H, <u>Arai Y</u> . Distinct patterns of cognitive traits in extreme old age and Alzheimer's disease. Alzheimer's Dement. 2025; Apr;21(4):e70155. doi: 10.1002/alz.70155. Bae H, Song Z, Ali A, Sasaki T, Tesi N, Lords H, Leshchuk A, Abe Y, Hirose N, <u>Arai Y</u> , Barzilai N, Weiss EF, Hulsman M, van der Lee S, van Schoor NM, Huisman M, Pijnenburg Y, van der Flier W, Reinders M, Holstege H, Milman S, Perls TT, Andersen SL, Sebastiani P. Increased genetic protection against Alzheimer's disease in centenarians. Geroscience. 2026 Apr;48(2):1815-1827. doi: 10.1007/s11357-025-01774-8. Kurata H, Meguro S, Abe Y, Sasaki T, <u>Arai Y</u> , Hirose N, Hayashi K. Kidney function and all-cause mortality in the oldest-old population: a three-cohort longitudinal study. Geroscience. 2026 Feb 9. doi: 10.1007/s11357-026-02130-0.		

- Perri G, French C, Agostinis-Sobrinho C, Anand A, Antariano RD, Arai Y, Baur JA, Cauli O, Clivaz-Duc M, Colloca G, Demetriades C, de Lucia C, Di Gessa G, Diniz BS, Dotchin CL, Eaglestone G, Elliott BT, Espeland MA, Ferrucci L, Fisher J, Grammatopoulos DK, Hardiany NS, Hassan-Smith Z, Hastings WJ, Jain S, Joshi PK, Katsila T, Kemp GJ, Khaiyat OA, Lamming DW, Gallegos JL, Madeo F, Maier AB, Martin-Ruiz C, Martins IJ, Mathers JC, Mattin LR, Merchant RA, Moskalev A, Neytchev O, Ni Lochlainn M, Owen CM, Phillips SM, Pratt J, Prokopidis K, Rattray NJW, Rúa-Alonso M, Schomburg L, Scott D, Shyam S, Sillanpää E, Tan MMC, Teh R, Tobin SW, Vila-Chã CJ, Vorluni L, Weber D, Welch A, Wilson D, Wilson T, Zhao T, Philippou E, Korolchuk VI, Shannon OM. An Expert Consensus Statement on Biomarkers of Aging for Use in Intervention Studies. *J Gerontol A Biol Sci Med Sci*. 2025 Apr 7;80(5):glae297. doi: 10.1093/gerona/glae297.
- Muramatsu Y, Oguma Y, Abe Y, Hara A, Urushihara H, Arai Y. Association between physical activity and quality of life in Japanese adults aged 85 to 89 years: a cross-sectional study. *BMC Geriatr*. 2025 Apr 2;25(1):216. doi: 10.1186/s12877-025-05864-2.
- Ando T, Sasaki T, Fujikawa H, Haruta J, Arai Y. Polydoctoring and health outcomes among the very old population with multimorbidity: a retrospective cohort study in Japan. *Sci Rep*. 2025 Sep 1;15(1):32046. doi: 10.1038/s41598-025-18178-5.
- Osawa Y, Abe Y, Takayama M, Arai Y. Six-year transition patterns of activities of daily living in octogenarians: Tokyo oldest old in total health study. *BMC Geriatr*. 2025 Aug 19;25(1):638. doi: 10.1186/s12877-025-06308-7.
- Shikimoto R, Gondo Y, Yasumoto S, Abe Y, Yagasaki K, Yoshimura K, Mimura M, Hirose N, Arai Y. Well-being of cancer survivors with exceptional longevity: A cross-sectional and prospective cohort study of centenarians and very old adults. *J Geriatr Oncol*. 2025 Sep;16(7):102285. doi: 10.1016/j.jgo.2025.102285.

氏名：新幡 智子	職位：専任講師	分野：慢性期・終末期看護
2025 年度の研究活動の概要： - がん薬物療法を受ける消化器がんをもつ高齢者を対象に、症状とコーピングや QOL との関連に関する縦断研究や症状クラスターとフレイルとの関連の 2 次分析について国際学会での発表や論文作成に取り組んだ。 - がんと循環器疾患を併せもつ高齢者を対象に、セルフケアのニーズと QOL について明らかにすることを目的とした質問紙調査および質的研究に参画し、論文作成に取り組んだ。 - 抗凝固薬の内服によるリスクとベネフィットを可視化するツールの有効性の検証に関するプロジェクトに参画し、他職種とともに、論文作成のプロセスに取り組んだ。 - 訪問看護師向けの在宅看取り教育プログラムの修了者を対象とした評価研究のプロジェクトに参画し、学会発表、論文作成に携わった。		
キーワード： がんサバイバー、緩和ケア、がん薬物療法、フレイル		
研究業績・活動 下記の K-RIS のページをご参照ください。 https://kris-db.adst.keio.ac.jp/chk?d=%2Fhtml%2F100012750_ja.html		

氏名：井上 真帆	職位：助教	分野：慢性期・終末期看護学
2025 年度の研究活動の概要： - 造血幹細胞移植後の外来通院患者における食欲低下に関する研究 - 同種造血幹細胞移植後の患者における就労課題に関する研究 - 高齢がん患者の食生活と身体活動に着眼したがん・心血管セルフケアプログラムの有効性（基盤研究 B 研究代表者：矢ヶ崎香教授）		
キーワード： がん看護、造血器腫瘍、造血幹細胞移植、外来支援		
研究業績・活動 - 造血幹細胞移植後の外来通院患者における食欲低下者の割合および関連因子を明らかにした調査結果について、論文作成に取り組んだ。 - 同種造血幹細胞移植後の患者の就労に関する研究課題を明らかにするため、復職や就労継続、復職を阻害する要因に関する文献検討を行い、研究テーマの立案に取り組んだ。 - がんと心血管疾患を併せもつ高齢者を対象としたセルフケアのニーズと生活の質を明らかにする研究（連携研究者）に参画し、質問紙調査およびインタビュー調査によるデータ収集を行った。 Daigo, K., Shiraishi, Y., Inoue, M., Arahata, T., Ieda, M., Yagasaki, K. (2025). Patient needs and self-care perspectives in cardio-oncology: Insights from a questionnaire-based survey. 第 8 回日本腫瘍循環器学会学術集会.		

氏名：上山 昌	職位：助教	分野：慢性期・終末期看護学
2025 年度の研究活動の概要： ● 免疫チェックポイント阻害薬による治療を受けたことのあるがん患者のアンメットニーズ、症状、QOL の実態を調査した研究について、論文投稿に向けて準備を行った。 ● 慢性呼吸器疾患患者のエンドオブライフケアに関する慶應義塾大学病院看護部との共同研究に参画し、研究計画、リクルート、インタビュー調査によるデータ収集に携わった。		
キーワード： がん看護、アンメットニーズ、エンドオブライフケア		
研究業績・活動 【社会貢献活動】 日本がん看護学会、日本臨床腫瘍学会、日本臨床腫瘍薬学会によるがん薬物療法における職業性曝露対策ガイドライン改訂版 システマティックレビュー委員		

氏名：大坂 和可子	職位：准教授	分野：慢性期・終末期看護学
2025 年度の研究活動の概要： 1. がん医療におけるシェアード・ディシジョンメイキングの実施の程度と関連要因に関する研究として、乳がん及び肺がんの診療やケアに携わる医師・看護師を対象とした調査を実施した。 2. ディシジョンエイド (Decision aids;DA) の開発・評価・普及に関する研究（共同研究）として、乳房再建 DA の評価（クラスターランダム化比較試験）、早期肺がん DA（アプリ）の開発と評価、早期肺がん DA（動画版）開発などに参加した。		
キーワード： シェアード・ディシジョンメイキング、ディシジョンエイド、がん、意思決定支援、患者の主体性		
研究業績・活動 【原著論文・総説等】 大坂 和可子, 石川 ひろの, 尾藤 誠司, 河野 佐代子, 中山 健夫. 患者参加医療における共同意思決定の役割と課題. 日本ヘルスコミュニケーション学会誌, 2026;16(11);21-30. Osaka W, Aoki Y, Yonekura Y, Danya H, Nakayama K. Online training for Japanese healthcare professionals in the development and use of patient decision aids to facilitate shared decision-making: An acceptability study. PEC Innov. 2025; 7: 100425. doi: 10.1016/j.pecinn.2025.100425. Sowa Y, Osaka W, Tsuge I, Komiya T, Saiga M, Taminato M, Nagura N, Shiraishi T, Seki H, Otsuki Y, Matsuoka Y, Tomita S, Akita S, Fujimoto H, Otani K, Yoshimura K. Shared decision-making using a decision aid for patients with breast cancer considering breast reconstruction: study protocol for a cluster-randomised controlled trial in Japan. BMJ Open. 2025;15(10): e094553. doi: 10.1136/bmjopen-2024-094553. 【学会発表】 小野 聡子, 伊東 美佐江, 大坂 和可子, 青木 裕見, 有森 直子. Decision Support Analysis Tool-I0 日本語版の言語的妥当性の検証(会議録), 日本看護科学学会学術集会講演集 45 回 Page [P2-23-04](2025 年 12 月) 【シンポジウム・ワークショップ】 大坂 和可子. 子どもたちの well-being を目指して-Biomedicine とは異なる研究アプローチの扉を開く- 子どもの医療における Shared Decision Making を促進するディシジョンエイドの活用(会議録), 脳と発達(0029-0831)57 巻 Suppl. Page s158(2025 年 6 月). (シンポジスト) Dawn Stacey, 大坂 和可子, 青木 裕見. 教育セミナー6「ワークショップ② 患者に寄り添う意思決定支援とは? -オタワ意思決定ガイドを用いた支援の実例-」. 第 45 回日本看護科学学会学術集会 (2025 年 12 月) (企画、当日の司会・運営)		

大坂 和可子. シンポジウム 3 Beyond Informed Consent: Shared Decision Making その先へ 「海外における Shared Decision Making と Decision Aids のエビデンスと臨床への実装の課題」. 第 39 回高精度放射線外部照射部会学術大会（2026 年 3 月）.（シンポジスト）

【その他】

オタワ個人意思決定ガイド日本語版©2025. 日本語版翻訳者：有森直子、大坂和可子、青木裕見. 日本語版承認日：2026 年 3 月.（原文が更新されたため原文開発者の許可を得て日本語版を更新した。日本語版はオタワ大学（カナダ）の Patient Decision Aids Research Group ウェブサイトに掲載された。原文「Ottawa Personal Decision Guide © 2025 Stacey, Lewis, O'Connor at the Ottawa Hospital Research Institute & University of Ottawa, Canada (with J Funderup in Denmark, S Kienlin in Norway, J Persson Kylen in Sweden).」）

氏名：小澤 典子	職位：専任講師	分野：小児看護学
2025 年度の研究活動の概要： - 慢性疾患をもつ子どもの成人移行期支援について、親子に対する支援の検討を行っています - てんかんをはじめとする病気をもちながら学校に通う子どもの支援として、学校の教職員を対象とした教育プログラムの構築に取り組んでいます。 - その他、看護大学生の精神的支援、NICU の看護などの検討も行っています。		
キーワード： 小児がん、小児慢性疾患、てんかん、学校看護、教育プログラム		
研究業績・活動 【論文】 NICU から在宅生活に移行した極低出生体重児を養育する家族の実態と家族のエンパワメントとの関連. 秋本 和宏, 涌水 理恵, <u>小澤 典子</u>. 日本小児看護学会誌 35 93-101 2026 年 3 月 31 日. 新生児集中治療室 (NICU) における End-of-Life 家族支援看護師教育プログラムの開発と満足度の評価. 齋藤佑見子, 涌水理恵, <u>小澤典子</u>, 齋藤沙織. 日本看護科学会誌 45 338-350 2025 年 6 月. 【学会発表】 <u>Ozawa N.</u>, Tomisaki E., Sou H., Miyagawa S., Yoshioka J., Horie H., Kandatsu A., Deguchi N.K., Soeda E. Practical Program for Managing Epileptic Seizures in Schools, Including BUCCOLAM® Oral Solution Administration: Effectiveness Among Teachers in Japan. 22nd Biennial School Nurses International Conference. 2025 年 7 月 23 日 Deguchi N. K., Ouchi G., Kagotani M., <u>Ozawa N.</u>, Kamazuka Y., Sato T., Matsubayashi D., Asakura T. Development of Metaverse-based First Aid in School Simulation for Anaphylactic Shock for Yogo Teachers. 22nd Biennial School Nurses International Conference SNI Japan 2025 Executive Committee. 2025 年 7 月 23 日 富崎 悦子, 瀬端 美沙子, 添田 英津子, <u>小澤 典子</u>. 日本の CLS(Child Life Specialist)の専門性に関するフォーカスグループインタビュー調査. 日本小児保健協会学術集会 2025 年 6 月 28 日 日本小児保健協会. その他の業績：https://researchmap.jp/7000025194		

氏名：添田 英津子	職位：准教授	分野：小児看護学
2025 年度の研究活動の概要： 1. 肝移植患児に対する移行期支援に関する研究 2. メディアと臓器移植に関する研究－映像メディアとソーシャルメディア		
キーワード： 肝移植、小児看護、移行期支援、野外教育活動、ゲーム、メディア		
研究業績・活動 1. 肝移植患児に対する移行期支援に関する研究 2025 年度は、海外（米国・ピッツバーグ）で行われている野外教育活動に看護医療学部学生2名とともに参加し、現地の研究者と情報交換をする機会を得た。 - COVID はじめ感染症の流行により開催できていなかった日本での野外教育活動を再開した。以前はスキーの時期に開催していたが暖冬（雪不足）のため、今回からは、湖でのカヌーやカヤックや沢登りを行うサマーキャンプを開催した。肝移植患児9名と医療関係者が参加し、安全に行うことができた。 2026 年度は、これまで参加していた肝移植患児に加え、腎移植患児も参加予定である。野外教育活動に参加する患児を対象とした調査研究を行う予定である。 2. メディアと臓器移植に関する研究－映像メディアとソーシャルメディア 詳細は、K-RIS をご参照ください。		
【社会活動】 - 公益社団法人 日本臓器移植ネットワーク 理事 - 日本移植・再生医療看護学会 理事長 - 一般社団法人 日本移植学会 評議員 学術・教育委員 - 日本肝移植学会 幹事 - 日本子宮移植研究会 理事 - International Liver Transplant Society, Allied Health Professionals committee member 20th International Intestinal Rehabilitation and Transplant Association, Co-Chair		

氏名：田村 紀子	職位：専任講師	分野：慢性期・終末期看護学
2025 年度の研究活動の概要： 1. パーキンソン病患者の排便セルフケアに関する研究 2. VUCA 時代の看護管理能力を高めるケースメソッド教育プログラムの開発		
キーワード： パーキンソン病、便秘、セルフケア、自己効力感、ケースメソッド教育		
研究業績・活動 1. パーキンソン病患者の排便セルフケアに関する研究 大学病院パーキンソン病センターの外来に通院中の患者の排便セルフケアに関するインタビュー調査の分析を進めた。またパーキンソン病の患者会の会員へのアンケート調査（研究代表者：藤井千枝子教授）に参画し、排便に関する内容についての分析を担当した。いずれも論文投稿準備中である。 上記の研究を契機に、パーキンソン病の患者会より依頼を受け、患者・家族向けのセミナーにおいて講師として登壇した。 【学会発表】 <u>田村紀子</u> ，藤井千枝子，手塚俊樹，関守信，岩佐由美．外来通院中のパーキンソン病患者が便秘に関連して体験している困難．第 19 回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス，2025 年 7 月 25 日（東京） <u>田村紀子</u> ，藤井千枝子．外来通院中のパーキンソン病患者の排便に関するセルフケアの実態：質的研究．第 45 回日本看護科学学会学術集会，2025 年 12 月 6 日（新潟） 2. VUCA 時代の看護管理能力を高めるケースメソッド教育プログラムの開発 前年度に続き、研究代表者（小池智子准教授）の行う大学病院管理者研修「VUCA 時代の管理実践能力を高める病院管理教育プログラム開発と評価」に参画し、教材となるケースの作成等に関わった。 【学会発表】 小池智子，加藤恵里子，内田智栄，宗廣妙子，岡本陽子，勝又徳子， <u>田村紀子</u> ．病院管理能力を高める多職種合同ケースメソッド教育の実施と評価．第 29 回日本看護管理学会学術集会，2025 年 8 月 23 日（札幌）．		

氏名：富崎 悦子	職位：専任講師	分野：小児保健
2025 年度の研究活動の概要： 1. ブコラムの研修プログラムに VR を取り入れて、3 月に特別支援学校の教諭に向けて研修を行った。今後効果を分析し、発表していく予定。 2. コンセプト学習についての勉強会をオンラインで Godfrey 先生をお迎えして 9 月に行った。Giddens 先生の本を翻訳していく出版した。 3. 医療的ケア児の在宅でのケアを体験できる VR を作成し、実際に学生たちが体験した。今後その成果をまとめていく。 4. 日本の CLS の専門性についてをまとめている。 5. 木育が多世代交流や参加者に及ぼす効果を測定し、まとめていく予定。 6. 地域で行っている多職種連携教育の効果についてまとめている。		
キーワード： 子どもの環境・医療的ケア児・CLS・コンセプト学習・多職種連携		
研究業績・活動 【論文】 Junji Haruta, <u>Etsuko Tomisaki</u> , Satoko Ishikawa, Tomonori Nakamura, Toshiaki Monkawa. A realist evaluation of community-engaged learning for health professions students in rural Japan: explaining learning processes associated with cultural humility and professional reorientation. <i>Advances in Health Sciences Education: theory and practice</i> . 2026 Feb 13. doi: 10.1007/s10459-026-10510-6.		
【訳本】 看護教育のためのコンセプト学習とコンピテンシー評価 原著第 3 版 第 5 章		
【学会発表】 ● 日本の CLS (Child Life Specialist) の専門性に関するフォーカスグルー プインタビュー調査 小児保健学会 ● 地域共創ウェルビーイング【演題 1】継続的リハ事業による高齢者支援 公衆衛生学会 ● 地域共創ウェルビーイング【演題 2】切れ目のないインクルーシブ子育て支援 公衆衛生学会 ● 地域共創ウェルビーイング【演題 3】全世代をつなぐ糖尿病予防のための支援介入 公衆衛生学会 ● 地域資源を活かした木育型リジェネラティブ・ヘルスプロモーションの検討 公衆衛生学会		

氏名：野末 聖香	職位：教授	分野：精神看護学
2025 年度の研究活動の概要： 1. 心不全患者の睡眠とメンタルヘルスの改善を目指した遠隔看護の開発と効果検証 2. うつ病看護ガイドラインの改訂のための関連研究の分析 3. 看護コンサルテーションに関する研究・文献の分析		
キーワード： リエゾン精神看護、精神看護専門看護師、うつ、睡眠障害、遠隔看護、心不全患者、看護ガイドライン		
研究業績・活動 【論文】 Y Sato, K Nozue: Nurses' Experiences Following Disaster: Moral Distress and Relational Loss. <i>Nursing Ethics</i> に投稿中 (2026.5.7 掲載: https://doi.org/10.1177/09697330261449464) 【著書】 野末聖香：看護コンサルテーションー理論・技法・トレーニング；日本看護協会出版会。（2026.3） 【研究、学会活動】 1. 心不全患者の睡眠とメンタルヘルスの改善を目指した遠隔看護プログラムの介入効果に関する研究の継続 2. 日本うつ病学会；うつ病看護ガイドライン改訂版の編著の継続 3. 日本うつ病学会；看護師のためのマインドフルネスとコンパッションワークショップ 座長 (2025.7)		

氏名：朴 順禮	職位：専任講師	分野：急性期看護学
2025 年度の研究活動の概要： 患者および家族、医療従事者への Well-being を目指す効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進するとともに、医療や社会へマインドフルネスとコンパッションによる心のケアの実践と普及を目指す。 1. 患者・家族および医療従事者へのマインドフルネス・コンパッションプログラムの研究開発 2. マインドフルネス、コンパッションに関する教育・普及活動		
キーワード： マインドフルネス、コンパッション、well-being		
研究業績・活動 Takeuchi M, <u>Park S</u> . Mental Health Care among Cancer Patients with BRCA Gene Mutations: The Potential of Mindfulness-based Intervention. Jpn J Clin Oncol. 2023 Mar 30;53(4):321-326. Keio J Med. 2025 Sep 25;74(3):151-157. doi: 10.2302/kjm.2024-0019-RE. Epub 2025 Feb 22. PMID: 39993778 Yuka Takita , Junko Morishita , <u>Sunre Park</u> et al. Mindfulness-Based Self-Management Program Using a Mobile Application for Patients with Pulmonary Hypertension: A Single-Arm Feasibility Study. JMIR Cardio: 2025 Dec 16. doi: 10.2196/79639. 朴 順禮、他. 研修会「GRACE プログラム」日本 GRACE 研究会、奈良、2025. 4 瀧田結香, 森下純子, 朴順禮. 「マインドフルネスを基盤とした肺高血圧症患者さんのためのセルフマネジメントプログラムおよびアプリの開発」帝京研究交流シンポジウム 2025, 8 朴 順禮. シンポジウム「メンタルヘルスにおけるマインドフルネスの活用について」第 63 回 全国大学保健協会関東甲信越地方部会研究集会. 2025, 8 朴 順禮. 講演会「心とからだを整えるセルフケア法 マインドフルネスを使って」令和 7 年深川南部保健相談所. 2025. 9 朴 順禮. 教育講演「マインドフルネス療法」第 38 回 日本サイコオンコロジー学会 沖縄 2025. 10 朴 順禮. 研修会講師「自分と他者へのマインドフルネス」東京精神科病院協会研修委員会主催 東京 2025. 10 佐渡 充洋, 朴 順禮、他. ワークショップ 「マインドフルネス認知療法」第 25 回 日本認知療法・認知行動療法学会 東京 2025. 11 朴 順禮. 特別講演「患者へのケアと医療者へのセルフケアに活用するマインドフルネス」第 13 回 日本 Whole Person Care 研究会 札幌 2026. 2		

氏名：福田 紀子	職位：教授	分野：精神看護
2025 年度の研究活動の概要： 研究 1： パンデミック下で活動する精神看護専門看護師の支援ツールの開発 研究 2： 心不全患者が日常生活に運動療法を取り入れる体験に関する質的研究 研究 3： 難民の背景をもち日本で就労しているシリア人の社会的統合（仮題） 研究 4： 循環器疾患患者を対象とした臨床研究への患者参画に影響を及ぼす障壁と社会実装への課題		
キーワード： リエゾン精神看護，精神看護専門看護師，睡眠障害，メンタルヘルス，心不全患者，質的研究		
研究業績・活動 以下の研究については全て共同研究として継続中である。 研究 1： パンデミックにおける精神看護専門看護師の支援ツールの作成に向けた文献検索と文献検討を進めている。 研究 2： アプリを活用した運動支援プログラムに参加した心不全患者へのインタビュー調査を実施。現在、論文投稿準備中である。 研究 3： 難民を支援する外部団体研究者との共同研究プロジェクトにおいて、インタビュー調査を実施。論文投稿し、現在、査読中である。 研究 4： 循環器外来に通院中の患者を対象にインタビュー調査によるデータ収集と分析を進めている。		

氏名： 藤島 麻美	職位：助教	分野： 急性期看護学
2025 年度の研究活動の概要： 1. <u>大学の教育環境を活用した潜在看護師に対する復職支援プログラム</u> 潜在看護師に対する復職支援プログラムの開発・実施・評価を継続して行った。2025 年度は、2024 年 11 月に実施したプログラム参加者 4 名を加え、前年度までの参加者を含む計 15 名を対象として分析を行った結果、看護の専門職的自律性の全下位尺度および合計得点に有意な向上が認められた。また、参加者の体験からは「復職をめぐる不安」「専門職としての再接続」「ピア交流による社会的つながり」「意欲の芽生え」の 4 カテゴリーが抽出された。大学を拠点とした復職支援プログラムは、潜在看護師の心理的障壁を軽減し、復職への意欲や専門職としての自律性を高める有効な支援となる可能性が示唆された。本研究成果は 2025 年第 45 回日本看護科学学会学術集会にてポスター発表し、現在英文投稿の準備を進めている。 2. <u>成人期発症型喘息患者のセルフマネジメントを強化する看護支援モデルの開発</u> 成人期発症型喘息患者のセルフマネジメントを強化する看護支援モデルの開発を目的として研究を継続している。これまでに実施したインタビュー調査の分析結果をもとに論文執筆し、現在査読中である。 3. <u>脳神経外科領域における ERAS プログラムの開発に関する研究</u> 脳神経外科領域における ERAS (Enhanced Recovery After Surgery) 導入に向けた基礎的検討を継続した。国内外の文献レビューを通じてエビデンスを整理し、看護実践への応用可能性や課題について検討を行った。		
キーワード： 復職支援、潜在看護師、セルフマネジメント、喘息、看護支援、脳神経外科、ERAS		
研究業績・活動 【学会発表】 浅川翔子， <u>藤島麻美</u> ：看護系大学の教育環境を活用した潜在看護師に対する看護師復職支援プログラムの効果．第 45 回日本看護科学学会学術集会，2025 年 12 月 5 日． 【社会貢献活動】 潜在看護師に対する復職支援プログラムの実施，2025 年 11 月 1 日（土）		

氏名：船戸 真衣	職位：助教	分野：慢性期・終末期看護学
2025 年度の研究活動の概要： 進行肺がん患者の症状と QOL に関する研究 薬物療法を受ける高齢進行肺がん患者の症状クラスターを同定し、症状クラスターと QOL の関係を明らかにした量的研究について論文作成に取り組んだ。		
キーワード： 高齢がん患者、進行肺がん、薬物療法、症状クラスター、QOL		
研究業績・活動 特になし		

氏名：堀口 崇	職位：教授	分野：急性期病態学
2025 年度の研究活動の概要： 今年度の研究活動の概要： 1. 献体解剖によって頭蓋底解剖を層ごとに平面上立体視で観察可能な学習ツールを開発し、その作成法と学習効果に関する検証を行った 2. 修士学生とともに、失語症患者に対する看護師と言語聴覚士の理解と関わり方の違いを検証し、より良い協同ケアの実践について考察した。 3. 修士学生とともに、がんと動脈硬化性疾患が併存する患者に関する疫学・臨床・医療経済の統合的レビューを Stroke/Cardio-Oncology の視点からおこなった。		
キーワード： 臨床解剖、病態生理、画像診断、脳循環代謝、手術、急性期看護、学習法		
研究業績・活動 Takatsume, Y., Shibao, S. & Horiguchi, T. Stereotactic Step-by-step Dissection of the Anterior Transpetrosal Approach: A Three-dimensional Photogrammetry-based Educational Tool for Neurosurgeons. Neurologia medico-chirurgica. 2025;65(10):469-477 Tomisaki, E., Haruta, J., Horiguchi, T., Arahata, T., Fukui, R., Uno, S., Ando, T., Yoshino, T., Ishikawa, S., Suzuki, S., Yamaura, K. & Monkawa, T. A Simulated Interprofessional Team Conference Using Cross-Training for Junior Healthcare Students in Interprofessional Education: A Qualitative Content Analysis. Advances in Medical Education and Practice. 2025;16:583-594 12		

氏 名 : 緑川 綾	職 位 : 助教	分 野 : 精神看護学
2025 年 度 の 研 究 活 動 の 概 要 : 1. 医療リワーク利用者（休職者）に対するマインドフルネスを用いた復職支援 2. 保健医療福祉従事者に対するこころのケア・メンタルヘルス支援		
キ ー ワ ー ド : うつ病看護、医療リワーク、マインドフルネス、ケアリング		
研 究 業 績 ・ 活 動 【研究活動】 1. 精神科デイケア（医療リワーク）で、8週間のマインドフルネス認知療法を実施し、パーソナル・リカバリーに関する効果検証を行った。（査読中） 2. 月1回、45分間、オンライン（zoom）にて、対人援助職向けのこころのメンテナンス習慣化プログラムとして、マインドフルネス瞑想とリラクセーション法を提供した。今年度はトライアルの実施であり、次年度はプログラム化に向けた効果検証などを検討する。 【ワークショップ・交流集会】 ● 第8回日本うつ病リワーク協会年次大会（2025年4月） 「医療リワークのマインドフルネス」 医療リワークスタッフ自身のマインドフルネスの体験として、瞑想ガイドと体験の共有を担当した。さらに医療リワークにおけるマインドフルネスの提供方法についてディスカッションを行った。（岩井祐二, 清瀬千彰, 緑川綾, 大橋昌資, 大磯宏昭） ● 第36回日本精神保健看護学会 学術集会・総会(2025年5月) 「精神科看護師のためのマインドフルネスとコンパッション」 マインドフルネスとセルフ・コンパッションの基本的な理論とプログラムの内容を紹介し、瞑想ガイドを担当した。（野末聖香, 佐藤寧子, 秋山美紀, 緑川綾） ● 第22回 日本うつ病学会 総会（2025年7月） 「看護師のためのマインドフルネス」 看護師自身のケアに活かす方法としてセルフコンパッションの理論とワークを提供し、うつ病看護に活かす方法として、医療リワークで取り組んでいるマインドフルネス認知療法について紹介した。（野末聖香, 佐藤寧子, 秋山美紀, 緑川綾）		

氏名：村上 好恵	職位：教授	分野：急性期看護学
2025 年度の研究活動の概要 1. 遺伝看護専門看護師の専門性に関する研究を開始し、データ収集を行っている。 2. 科学研究費（基盤研究 B、2020-2024）「がんゲノム医療に対応するがん看護専門看護師育成のための介入研究」のデータの論文執筆中。 3. 科学研究費（基盤研究 C、2025-2027）獲得し、実施中。		
キーワード がん看護、遺伝看護、サイコオンコロジー、クリティカルケア看護		
研究業績・活動 【学会発表】 村上好恵, 今井芳枝, 福田友秀, 細萱 順一：急性・重症患者看護専門看護師による循環器疾患の遺伝学的検査に関する意思決定支援関与の実際. 日本看護科学学会学術集会講演集 45 回 Page [P2-27-03], 2025. 村上好恵, 今井芳枝, 川崎優子, 武田祐子：遺伝性腫瘍の患者や家族へのケアに関するアセスメント視点を学習する教育プログラム内容と運用方法の検討. 日本がん看護学会学術集会 40 回 Page P21-358, 2026. 古谷佳穂里, 石井有紀, 池田杏里, 片岡光, 村上好恵, 岡本陽子：末梢静脈投与下でのオキサリプラチン血管痛発現のリスク因子と対処法に関する文献レビュー. 日本がん看護学会学術集会 40 回 Page P10-212, 2026. 【社会活動】 - 第 24 回日本遺伝看護学術大会大会長（2025 年 9 月 20 日～21 日） - 日本がん看護学会 理事 - 日本遺伝看護学会 理事 - 日本サイコオンコロジー学会 理事、 看護師対象研修コース Step3 ファシリテーター - 日本遺伝性腫瘍学会 評議員		

氏名：矢ヶ崎 香	職位：教授	分野：慢性期・終末期看護
2025 年度の研究活動の概要： 1. 高齢がん患者の食生活と身体活動に着眼したがん・心血管セルフケアプログラムの有効性 2. 進行消化器がん患者の食欲とコーピングストラテジー、QOL に関する縦断研究 3. 抗凝固療法に関する効果的な意思決定支援方法の探索：Tool 開発と評価 (Mixed Methods)		
キーワード： がん看護、高齢がん患者、がん薬物療法、腫瘍循環器、セルフケア		
研究業績・活動 【学術論文】 Shikimoto R, Gondo Y, Yasumoto S, Abe Y, <u>Yagasaki K</u>, Yoshimura K, Mimura M, Hirose N, Arai Y. Well-being of cancer survivors with exceptional longevity: A cross-sectional and prospective cohort study of centenarians and very old adults. J Geriatr Oncol. 2025;16(7):102285. doi: 10.1016/j.jgo.2025.102285. Manabe T, Oguma Y, Tabira K, Sugimoto M, Negishi K, <u>Yagasaki K</u>. Association between near functional visual acuity and physical function in community-dwelling older adults: a cross-sectional study : Keio university global research Institute baseline survey. BMC Geriatr. 2025;25(1):405. doi: 10.1186/s12877-025-06074-6. 杉本 美希, <u>矢ヶ崎 香</u>. 非ホジキンリンパ腫患者の HRQOL の影響要因 スコーピングレビュー. 日本がん看護学会誌. 2025. 39. 78-90. 【学会発表】 <u>Yagasaki K</u>, Arahata T, Ishida H. Change in performance status and quality of life in older adults with advanced gastrointestinal cancer: a longitudinal study. SIOG Annual Conference 2025. 2025.11. (Belgium) 【主な研究活動】 1. 腫瘍内科医と腫瘍循環器医との共同研究：「高齢がん患者の食生活と身体活動に着眼したがん・心血管セルフケアプログラムの有効性」第1ステップの研究プロジェクトの実施（定量的研究：査読中、定性的研究：論文準備中） 2. 循環器内科医らとの抗凝固療法に関する効果的な意思決定支援方法の探索：Tool 開発と評価 (Mixed Methods) に関する共同研究：論文準備中 3. 進行消化器がん患者の食欲とコーピングストラテジー、QOL に関する縦断研究（査読中）		

